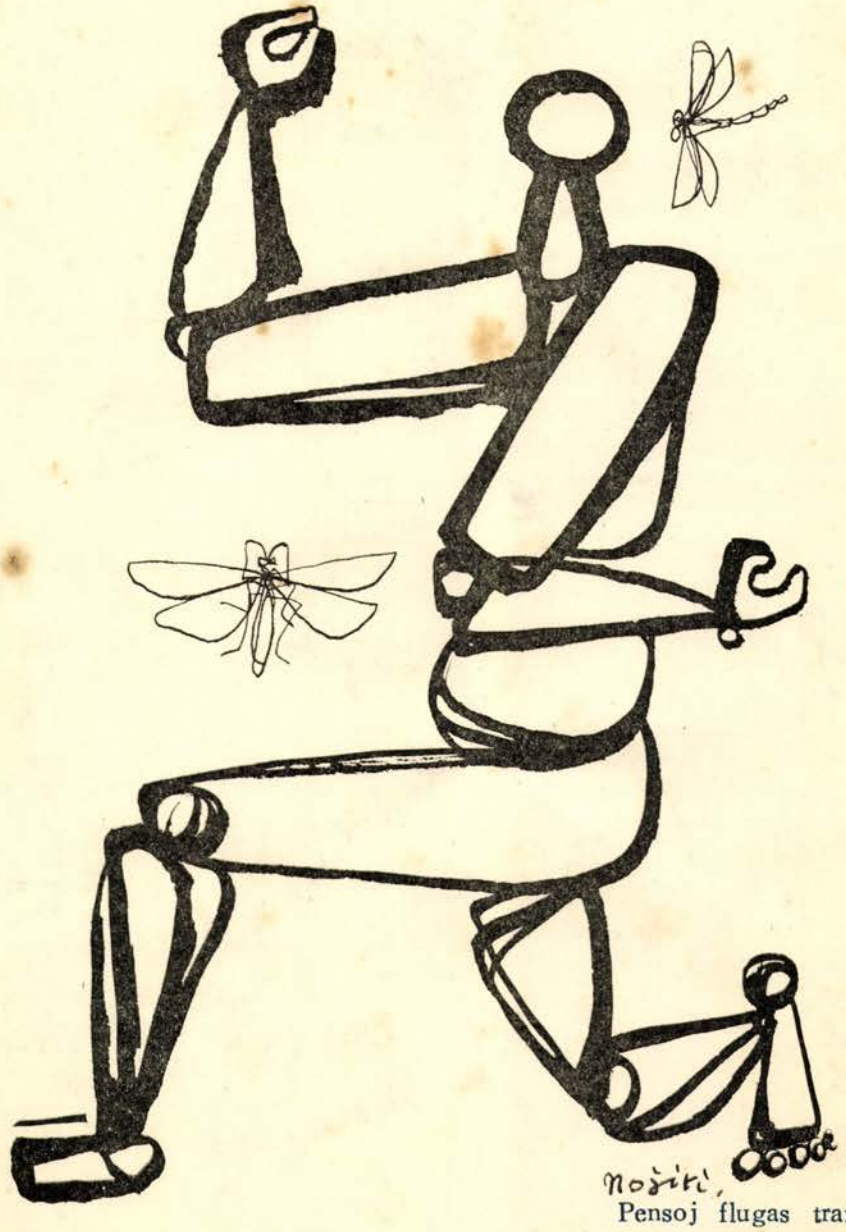
川柳雑誌

らか『誌雑柳川』も義奥も門入

麻生路郎☆主宰

九月號



Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 364

昭和廿一年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿一年九月一日発行第十三卷第九号
（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年・通巻三百六十四号

・川柳雑誌社主催・

川柳忌句会

日時　九月七日（土）午後六時
会場　光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）
―電話天王寺九二六〇番―

兼題
「鈍才」（三句）　若本多久志選
「審査員」（三句）　麻生路郎選
「舌」（三句）　松江梅里選
「初対面」（三句）　佐野白水選

席題
三題（当日発表）　麻生路郎
柳話　川村好郎

句評
★各題天位　★路郎選天位に不朽洞賞

呈賞
五拾円

会費
幹事　紫香・淡舟・賀峯・白水・十悟・いさむ
愛論・東洋男・潮花・与呂志・一三夫

川柳雑誌社句會部
大阪市住吉区万代西五ノ二五
電話住吉六〇八〇番

大阪市民文化祭

第九回　大阪市民川柳大会

日時―十月十三日（日）十時開場
会場―毎日新聞社三階講堂

兼題
一「泣き笑い」
一「米」
一「重役」

真に大阪市民のためにこの一日を提供したいと思って居ります。挙って御参加下さい。
選者・講演者・呈賞・余興等々詳細は次号本広告欄に発表。

兼題投句―用紙官製はがき一枚につき一題二句宛―〆切十月七日着便。投句先―大阪市北区中之島　大阪市教育委員会社会教育課内「市民川柳大会係」宛。

☆　大阪市民文化祭行事　（短詩文学関係）

恒例の行事を左の通り開きます。詳細は各新聞並に各結社誌上の予告及び連盟の案内等により御承引の上市民文化興隆の為絶大の御協力をお願申上ます。

第六回　短歌大会　十月六日（日）毎日新聞社講堂
第九回　川柳大会　十月十三日（日）毎日新聞社講堂
第五回　俳句大会　十月廿七日（日）朝日新聞社講堂
第壱回　詩の大会　十一月九日（土）BKスタジオ

主催　大阪市
関西短詩文学連盟
☆大阪市教委
後援　各新聞社

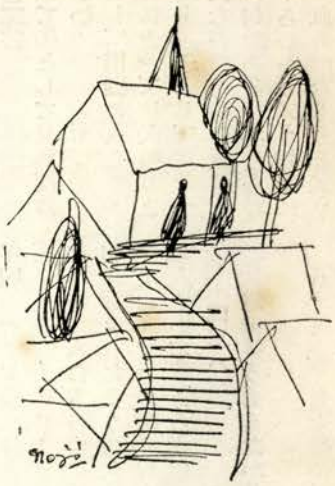
北國川柳大會

北国柳壇の選者を迎えて

日時　九月八日（日）正午
場所　金沢市南町北国新聞社四階講堂
兼題　「顔合せ」路郎選　「女流」豆秋選
「公園」夢考選　「祝辞」白柳子選
「ニュース」六葉選　「懐てる」鬼水選
「虫」千太郎選　―各題三句―
締切　八月三十一日着便
席題　三題（当日発表）
講演　「短詩型文学と社会性」　麻生路郎
宛先　金沢市南町北国新聞社北国川柳大会係
呈賞　★各題秀句　★路郎選天位に揮毫短冊
会費　出席者五拾円（当日受付）投句のみ三十円

主催　北国新聞社
後援　県下各川柳社

窓口談義



映画「智恵子抄」の試写を観て川柳を想う

彫刻家で詩人だった故高村光太郎の詩集「智恵子抄」を映画化した「智恵子抄」の試写を見た。映画のカメラの苦心や表現の巧みさにも敬服したが光太郎に扮した山村聰や、光太郎の妻に扮した原節子の演技力には魂を奪われた。殆んど二人が出場しているんだし筋と云えば極く単純なものだが、夫婦愛の至純さが私たちの胸を強くうたずにはおかなかった。ジッと画面に吸いつけられているうちに、涙がとめどなく、ボタボタと落ちた。

映写が終って膝の上にのせていたビラを見たらまだ涙が乾いていないし、膝の上の茶色の皮鞄の上にも、涙がかたまりになって盛り上っていた。これまでの映画でも涙を流したことは度々あるが、この「智恵子抄」ほどに涙を流したことは曾てなかった。しかし、この映画に流した涙と、曾て観た涙物の映画の涙とは全く別箇の涙であると云いたい。所謂涙物の涙は、筋の上に、コレでもか、コレでもかと、押しつけて行くドラマチックな仕組みで涙を絞り出したものであるがこの「智恵子抄」は前にも云ったように、筋は極く単純で、芸術家高村光太郎とその妻との純情物語に過ぎないのであるが、従来の涙物の涙よりも、より以上にしかも自然にとめどなく涙が流れたのであった。その点から云って、この映画はドラマチックなあくどさがなくても、秀れた映画が創れると云うことを教えている特異な存在の映画だと云えよう。私はこの映画を観て、俳優もラクじゃないなァと思わず溜息を漏らしたものであった。

それはどんな仕事だってホントの仕事をしようとすれば決してラクでないことは云うまでもないが、山村聰、原節子の演技を観て特にそう感じたのである。所謂劇らしい劇の演技なら、俳優である以上、ハタで観るほどに至難ではなかろうが、劇らしいあくどさを乗り越して、極く自然に淡々とした演技によって大衆の心を摑むと云うに至ってはなかなか容易なことではないと思われるのであった。川柳も亦同じことが云えると思う。所謂川柳らしい川柳やあくどい川柳なら、多年川柳に携わっているものにとって大してむずかしいとは思われないが、そんなものを幾ら作っても、作り甲斐のないものである。淡々とした作風で、しかも大衆の胸を打つ作品と云うものはそうやすやすと創れるものではない。短詩型文学としての川柳は映画に見るような華々しさがなく、至って地味な存在であり、しかも、そこには血のにじむような精進が要求されるのであるから、ホントに秀れた作品を遺す作家は幾人も居ないのである。しかし今までに世に遺っている作品の中から（現代作家の作品をも含めて）「智恵子抄」級の至純な作品がないかと云えば決して尠くはないと云えようが、あまりにもチャンバラ式映画に比すべき作品がハンランしている事実は否定することが出来ないと思う。この点、作家の作句態度が遊戯的であるか文学としての作家であるかによって分岐点を為すものと思惟していいだろう。

（路）

不朽洞句帖

麻生路郎

ロマンスグレーの扱いされて秋に生き

晴耕雨読だが恩給に縁もなく

敷かれてりゃ無事に暮らせる世と悟り

街の女もとのからだにやなりませぬ

——九五七・八

九月号目次

題字……麻生路郎
表紙……野尻弘
映画「智恵子抄」の試写を観て川柳を想う……麻生路郎…（三）
不朽洞句帖……麻生路郎…（三）
川柳家の二十四時
須崎豆秋・森下冬青…（一四）
池田可宵……（一五）
川柳文学の再検討……田中辰二…（一三）
旅に生れた句……正本水客…（一四）
全国の名物と川柳行脚……水谷竹荘…（一八）
将棋の升田を語る……後藤梅志…（一九）
川柳と婦人……並木東田楼（二七）
新川柳鑑賞……麻生路郎…（四）
川柳とトマト……金井文秋…（一六）
暖簾……木村十悟…（一九）
五尺そこそこ……関すゞ女…（一九）
水郷句会に出て……東野六八…（二一）
特別課題夫婦発表……（二三）
短評……麻生路郎…（二三）
家庭劇を観る……不二田三夫…（二五）
社の黒板……（二八）
青ペン・赤ペン……（二一）
飛燕往来……（三八）
★
川柳塔……麻生路郎選…（六）
同舟近詠……諸家…（一〇）
近作柳樽……麻生路郎選
北川春巣選…（一六）
一路集「愛人」……土井文蝶選…（三一）
福田妄夢選…（三一）
金泥集……麻生葭乃選…（二七）
各地柳壇……（三三）
川柳第二教室
作句指導……戸田古方…（二六）
不朽洞会から……（三八）
柳界展望……（三〇）
編集室から……（三八）

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔四三五〕
俺の齢桶なら輪替えする時分　（柳葉）

とうとう停年が来た。一寸疲れも覚える。シャニムニに闘って来た人生に対して反省したのである。この句を読むと一沫の淋しさを感じさせられるではないか。そうだ。輪替えして余生を大いに楽しむ必要があろう。

〔四三六〕
妻として子として見れば詐欺ぐらい　（谷水）

詐欺として囹圄の人となったが、妻にとっては矢張りよい夫であり、子としてはなつかしい父なのであることを、強調した句である。下五の「詐欺ぐらい」と云う措字によって、血のつながりと云うものが、罪悪を超越するほどの強さで表現されているのでこの句にいのちが生じたのだと思う。

〔四三七〕
失恋の痛手天理のハッピ着る　（散歩）

天理のハッピを着た人々を車中などでよく見かけるが、その素朴さが私たちにとっては、いかにも淋しい姿として眼に映る。特に青春に燃える年頃のハッピ姿にはある種の痛ましささえ感じさされる。それ等の人たちの中にはこの句に詠まれたような失恋の痛手をハッピの奥深く包んでいる人もいるであろう。

〔四三八〕
敬老会笑う力もなかりけり　（香林）

八十幾つ、九十幾つ、ながく生きたと云うだけで、敬老会に招かれる。もう眼がうすい、耳が遠い、水ばなをすすりあげる。全くザマはない。笑う力もないとは哀れな話である。この句、老人にとっては実に痛い句である。

〔四三九〕
献盃献盃B29のように来る　（春日）

いける口と見られたのであろう。追っかけ、ひっかけ盃が来る。それを本土襲来のB29号が、あとからあとからやって来て攻撃の手をゆるめなかったのに比したのである。比喩法の表現技巧で生かされた句である。「献盃献盃」と畳みかけた手法がこの句をいきいきさせたことも見逃がせない。

〔四四〇〕
よだれ拭くにも愛妻のお手をかり　（不水）

老境に入ると他愛がない。又してもよだれが出る。それをハタに附き添うている愛妻が拭きとって呉れる。それは母親が子どもの世話をやいているのと大して変らない。私は曾てそうした老夫婦を目のあたりに見たのでこの句の軽妙な写生振りと、そのケイ眼を讃えたい。

〔四四一〕
おいしいと云わない人と妻悟る　（水客）

「おいしい？」と妻がきいても、「そうだなァ」と云うだけである。世には妻の苦心の料理を、ただムシャムシャと食うだけで決してうまいと云わない夫が居る。「そうだなァ」は「まァこんなものだなァ」にも通じる。「うまいものが食いたければ一流の料理屋へ行くよ」と云うのかも知れない。妻のまごころが通じないとなると妻としては立つ瀬がないのである。わたしの料理をほめたからって夫の沽券にかかわりもすまいにと思う。しかし決してほめてくれないことを知ってそれからは「おいしい？」を繰返えさなくなった。

〔四四二〕
生酔いが70圓を待って乗り　（生々庵）

生酔心理をズバリとつかんだ句である。「ああ、今夜はだいぶ酔ったぞ。まだ少々は呑めぬことはないが、足元は決して楽観出来る状態ではない。ネオンが眼を射る。クルマで帰ろうと思うが、サテとなると、百円のクルマは見送ってしもう。八十円が来たが手をあげようとしない。この生酔心理は盃に残った僅かな酒の一滴も余さないのと共通する点がある。

〔四四三〕
奥さんは乍末筆だけのひと　（妄夢）

男と男とのつきあいはかなり親しくしていても、お互いにその奥さんとは顔を知ってると云う程度、イヤ顔さえ知らないことの方が多いが、手紙の末尾には乍末筆奥さんによろしくなどと書く。幾年つきあっていっても、その線からは一歩も出ない。そこをとらえたのが、この句である。二人にとってはアクセサリー的存在の奥さんだとも云えよう。

〔四四四〕
本当の仕事はコンマ以下がやり　（水堂）

本当の仕事をコンマ以下がやってるか、どうかはハッキリしないが、そうでも思わねば仕事なんて出来るものでは

ない。

問題はホントの仕事とはどんな仕事かと云うことである。この句の場合、コンマ以上は遊んでいるか、アクセサリー扱いにしているようにとれる。それでは物の半面しか見ていないのでないかと思う。この句のような考え方からストが片意地になったりするのである。その反面コンマ以上がホントの仕事をしていると思う時に、コンマ以下に仕事をぶち毀わされることがある。コンマ以下も、コンマ以上も考える必要があろう。

〔四四五〕

取締役会長になり菊作り

（一ン十）

喜寿もすんだ。金も出来た。肩書もかなりあるが、それも煩わしいだけだ。今では是非と請われるまま、取締役会の会長だけ引うけさされて時々顔を出すだけである。たまたま人が訪ねて来ると庭先から上って来て、

「近ごろは菊作りでなァ」と悠々自適していることをさも誇らしげに、菊談義をやると云うのである。財界に多少とも色気のある人物を髣髴とさせる句である。

〔四四六〕

湯豆腐で一つときUSA忘れ

（草一郎）

アメリカに居ても、一世にとって湯豆腐の味は忘れられない。そこでアチラに居ても天ぷらも喰べるし、湯豆腐も喰べる。四囲の環境がすべてアメリカではあるが好きな湯豆腐の一つときは全くここがアメリカであることをさえ忘れていると云うのである。いくら帰化していても斯うして折にふれ、物にふれては祖国を忘れ得ない人たちがかなり多いのである。

〔四四七〕

株少し持つて哀れや気が小さし

（矢寸志）

僅な株を持って、夕刊にかじりついている人種を嘲笑した句である。少し変動があっても、川釣に浮きがビクビク動いたほどに感じて大騒ぎするのを見て憫笑したのである。世の中には株で儲けたいと云う人間がかなりウョウョしているが、大ていは僅な株を持ってビクビクしているのである。皮肉られても返えす言葉はないであろう。

〔四四八〕

大風に一家を背負う人默し

（太郎丸）

大風の強靱な破壊力の前には家も人も問題ではない。一瞬にして吹き飛ばされてしまうのである。一家を背負う人が、大風に対して僅な抵抗すら持ち得ないことを知った時その心は暗い。ただ默りこくるより仕方がなかったのである。

〔四四九〕

光陰遲々として月賦はまだすまず

（多久志）

「光陰遲々として」と大げさな云い方をしているが、それが月賦に対して云っているところにユーモラスを感ずる。光陰矢の如しと云う成句があるが、それは速いのと、行ったら戻らぬのを云ったものであるが、月賦の場合にはいつまでもいつまでも月賦を取立てに来るようで、なかなか月日が経たない。そこで光陰遲々としてと詠んだのである。

〔四五〇〕

ステテコの貧相な足を見せる秋

（ひか平）

太った男の、あんどんのようなステテコ姿は似つかわしいような感じがするが、痩せ細った男の貧相な足がニューッと裾短かなステテコから出ているのを見ると「ああ、秋だなァ」と云う切実なものを感じさされると云うのであるいつのほどにか夏の過ぎたことを巧みに表わしている。

〔四五一〕

まだ雨が来そうに線路蟹が這う

（ひさみ）

雲が低くおりている。一ト雨あって、線路の砂が洗い出されている。まだまだ雨が来そうだ。ふと眼をやると蟹が這うている。何んと云う静かな情景であろう。作者の寂びしい気持ちがそうした情景にピタッと来たのである。叙景川柳として秀れている。

〔四五二〕

丸刈にしようかと妻を試してみ

（五茶）

仕事に責任を持つ地位となると、長髪もいささか面倒になって来た中年の男なのであろう。

「あんた、一ペン散髪に行ったらどう？」と妻から散髪をサイソクされる始末「そうだなァ」と云うものの、なかなか動かない。「いっそ丸刈にしたらと思うが……」と妻の方へ顔を向ける。妻が容易に賛成しそうにないことを知っていながら……と云う句である。中年の夫婦の心理をうまくとらえている。

〔四五三〕

バンガロー今宵は月が出ぬそうな

（水鏡子）

「今宵は月が出ぬそうな」は流行歌からの文句取りであるが「バンガロー」と上五を据えただけで二人の情熱を燃え上らせたところに、この句のいのちがある。引用句の多くは、そうした成語に引きずられて失敗し易いものであるがこの句のように殆んどが引用句で埋められていて句をなしているのは勘ない。

お茶・お花・割烹
和裁
その他 人形・編物・書道・声楽・ピアノ・バレエ・邦楽・邦舞など一流の先生方の御指導によってお手軽に講習が受けられます 御入会は随時（入会金三〇〇円）詳細はクラブ事務所まで
松坂文化クラブ
大阪松坂屋7階(64)一五三一

川柳塔

大阪市　中島生々庵

自尊心町医者だから髭をおき
御用聞きさえ来ぬ雨に御来診

瑞川氏病む

病床に就けば巨躰のしおらしさ

豊中市　戸田古方

新装拡張書籍売場は隅の隅
にんげん時代そうそう続きそうでなく
岩のいのち考えながらハイキング

大阪市　市場没食子

出勤は私鉄で通うとこに住み

西宮市　若本多久志

さて死ぬる時念仏に十七字
名句ですねえと理解はしておらず

南陵を聞く

講談の鎗は九尺にみせて突き
ハイヒール中ヒール婚期過ぎてゆき
友はよし一緒に呑んだ嘘も云い
ビヤホール男を知らぬ娘が運び
振り向いてやったに女ッンとして
チップ貰う列車ボーイは男前
創価学会へ日連もにが笑い

ホノルル市　前山北海

レイかけてキッスする娘に主賓てれ
食堂に帰国費稼ぐ破境の身

ホノルル市　内藤草一郎

一トロは二号名儀もある保険
成功を見せに寄られた迷惑さ

東京都　宮田不二

時間潰しならとデパート教えられ
いささかは辞して結局御就任
これ以上肥えては困るクラブ振る

ホノルル市　築山快夢起

岸首相訪米

岸アイクシャワーで肝胆相てらし

ホノルル市　白砂旋風

パパママに食扶持呉れの育てかた
どう見ても釣合わぬ夫婦金があり
二十階ホノルル雲に突きあたり

ホノルル市　羽佐間柳葉

初恋はただ月をほめ虫を褒め
貧乏が金のリズムに抗し得ず

大阪市　福田妄夢

ラッシュアワー押せ押せ前にきれいな娘
マニキュアもネックレスもいいが首にあか

大阪市　正本水客

外遊を前に明るい歯の治療
いちど遊びに来いと山の寺を継ぎ
芝居の門別れが済めば片附ける
見送りとはっきり分る顔で立ち
顔立ててやったと両方から思い
受付へ嬉しい顔が続いて来

大阪市　丸尾潮花

どこへでも行けと蜻蛉の糸を切り
かき船の灯へ漕ぎよせる貸ボート
口説いたりじますかいなと呑まされる

大阪市　北川春巣

替ズボン妻おどろかす派手を買い
発達心理学通りおはじき直ぐに飽き
死んでからバックボーンをほめそやし
ブルジョアやおごられておくビヤホール
うるさ型扇子の音をバタつかせ

岡山県　浜田久米雄

もうなにかないか洗濯機がたすね
干す場所がなくなっている洗濯機
洗濯機動し女気が疲れ

岡山県　逸見灯竿

泥靴を並べて梅雨はいやですね
先生を今日からやめた酒を飲み

大阪市　武部香林

北枕などと入院云うとれず
眼の底に鋏の音の手術台
立志伝父とは生んでくれただけ
一トト筋の煙となるに金を貯め
引っかかったボス肩書をたんと持ち
薬局は隣の医者をちとけなし
男の箸に絹ごしのもろさよ

出雲市　尾緑之助

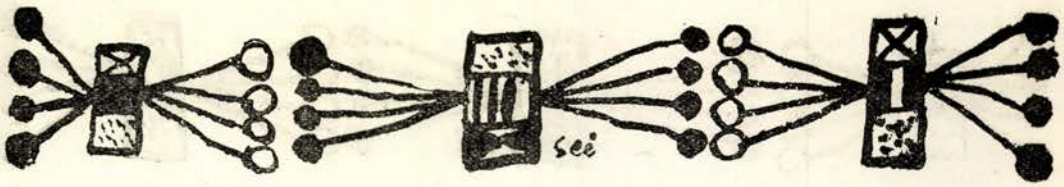
長い梅雨祭の花火にぶいこと

大阪市　水谷竹荘

浮世絵の様に二号は瓜を切り
恋せねば髭の伸びたも気にならず

堺市　吉田圭井堂

クラス会やもめ次第に増えて来た



鳥取市　杉谷湖山

満ち足りた寝息踏み場のない寝相
団体の客にすまない雨となり
逢引の道をほたるの明滅す
ある時は先生吾が子の様叱り

広島市　国弘半休

郊外は新緑カッターシャツにする
沿線の雀煤けたとも云わず
アパートの初夏は世帯をさらけ出し
節電のあんなところへ螢光灯

西宮市　小沢史葉

二号宅へ送る気二台の洗濯機
家元をつぐ気で握る花鋏
映画のまねやと子供にキッスされ
美しい秘書がおるのでノックする

兵庫県　小西無鬼

先生古稀祝い
謡曲もよいなあと思うた古稀祝
早孫を願う気僕の気を叱り

尼崎市　小林文月

種痘あともアクセサリーの一種とか
教諭講師嘱託雇と老けていき
長男小型自家用車を買う
父の世に出来ぬを子等がやっとやり

大阪市　冨岡淡舟

父さんの方がうまいと留守の膳
百円のビールに酔うて笑われる

奈良県　飯降白香

口あけば自由正義とばかりいい
麦畑高圧線がつづいてる

奈良県　西辻竹青

✓退職の坐りたくない床柱

水難をよいことにして遅刻の手

山口県　長野井蛙

考えて置くわとドライガムを噛み
酒の気が切れると笑い又忘れ
やけ糞の女給が呑んだのも払い
イヤリング銭湯へまでつけて行き
税務署へ親指可笑しい程あわて

呉市　林野甦光

東京の広告マッチ大事がり
蚊帳吊って当分楽な橋の下

岡山県　直原七面山

三千円盗むに家内中殺し
雞の様に父御の首を締め
せがまれて気分の乗らぬキッスをし

鳥取市　河村日満

古稀祝賀川柳大会に参加して
孫がまだ一人と古稀の気が若し
朝っぱらから酔わすかと嬉しそう
心中する程の恋ならして見たし

岡山市　服部十九平

うどんへも矢張り十字を信者切り
冷飯へ後妻を貰うかと思い
拗ねていて団扇の骨の数を読み

尼崎市　長谷川三司

旅人へどこまで続く菜の花ぞ
この中のなんぼかやみになる田植
楽屋では無口で通る三枚目

兵庫県　若林草右

馘近し楢山節考読みかえし
レコードでこと足る駅のアナウンス

大阪市　足立春雄

滞在二日ソーラン節をもう踊り
悲しさは観られる丈にアイヌ生き
夏祭まだ海ホーズキもあるを知り
学問のただそれ丈で済まぬ世の

熊本県　有働芳仙

斗病は斗病恋は恋らしく
戦争の気配が欲しい株を持ち
雑草のお蔭園丁食って行け

下関市　石川侃流洞

温泉の街の情緒へ雨の音がよし
水着ショウかぶりつきから声があり
老妻の水着あそこもここもしわ
丸ンごとかぶるトマトへ陽のにおい

広島県　山田季賛

あそこまで知ってると云う二日酔
生きんため橋の下にもお湯が沸き
一人旅なんと降る降る梅雨の雨

大阪市　山本葉光

高第の嬉び祝辞吃りつつ
禁煙を守る祝賀の青畳
黙否権お手数かけますとは云わず

倉敷市　木村千容

網棚へ重ねてのせた遍路笠
三宮もう降りますという姿勢
淡々と流れてるよな夫婦です
貧世帯どう切り盛つた肉かいな
立話老の字のつく刑事さん
客程に亭主の機嫌ようとらず
趣味や道楽で水商売が出来るかい

倉敷市　田垣方大

口紅をつけとらん娘がまだおった
一時間待っても今来たばかりです
冷戦へバーのマッチが火をつけて
石川県　那谷光郎

官庁は五分遅れた叱りよう
病む妻に後妻貰えと皮肉られ
ラジオニュースで驚きましたと見舞状
税務署が来たへ蹴飛す煙草盆
子が放送します時間をふれ歩き
石川県　野村味平

老妻に死なれてからの釣の趣味
夏痩せを気に病むうちに秋になり
大阪市　木村水堂

雨降れば街中浸る文化都市
停年へまだ五年ある呑みっぷり
倉敷市　水谷谷水

お見合の引立役とは妻も老け
財産家の末路夜店で見て帰り
キスマーク位いで夫君閉め出され
失業はいいなすきな日海にいけ
三等を見てたら二等で来やがった
流感にしといて呉れと休暇とり
キトクだと云うのになにが王手飛車
係長さんも廻って来ぬ暑さ
岡山県　田村藤波

仏壇の西瓜へ子等の日が永い
豆腐半丁買うて事足す老夫婦
岡山県　岡田夜潮

ごろつきの大阪弁は物足らず
没落へこわれた塀がよく似合い
いかめしき屋敷なりしが貸間札
出勤簿課長の前に置いてあり
体罰が出来ぬを先生歯がゆがり
岡山県　本田恵二朗

路郎先生の古稀を祝して
七十の貫禄床の間に匂い
大阪市　真鍋一瓢

このやや子おでこでしょうと嬉しがり
呑むばかり妓も喋るのに疲れ
燃えつきた楷によう似て女将居る
力ない猫女仇に嚙まれて来
スムースにやったと葬儀委員長
京都市　松川杜的

新聞の記事が女傑にしてしまい
南方は良かったなあとバナナむく
残された葱坊主の一つなるか吾
田植唄右に左に汽車曲る
大阪市　後藤梅志

音無しの構えで雨は降っており
各停に乗りぜい肉をためて居り
純だったなマッチのペーパーまでもため
いま立った女のあとが余まるなり
倉敷市　松村万古

養うているのに恐妻とは哀れ
長期戦覚悟の書見器を買われ
倉敷市　藤井春日

恋心酌がれるままに飲んでいる
娘十六父の入墨気にし出し
庁舎移転うどんやまでもついて行き
文盲の口から直い意見が出
岡山県　津田麦太楼

終電車女疲れて美しい
夏の宵余所の女房の美しさ
師の古稀祝賀句会
矢印を辿り網島御殿まで
米子市　小西雄々

背の高い方なら嫁ぐアンケート
垢ぬけもせずに家出の娘が帰り
だまされて瞞して女強うなり
堺市　高崎雄声

愛人がボタンをつける程になり
経済の都会で謹言居士になり
大阪市　吾郷玲人

湯の宿も鶴の間と云う老夫婦
大掃除の日今日は早出と云う息子
押して来る美人をスリだなと思い
島根県　藤井明朗

リューマチになっても勝気衰ろえず
後妻を貰えと子等の出来のよし
岡山県　永松東岸子

恋をしても娘は食い盛り
食うための男卑屈な顔になり
住職もいつか事務員さんとして
百円も持たず詰将棋へ見入り
歩のような男規則をたてにとり
夕焼にとけて消え行く寺の鐘
老嬢のいつか便りも来なくなり
宿願の家建ててから寝たっきり
田を売った金もいつしか飲んで消え
声変り笑顔する娘に変って居
子はあてにせぬと公言してるけど
倉敷市　野田素身郎

栄転の机の巾を撫でて見る

蓋明けて見たら反対僕一人
大阪市　神谷凡九郎

鼠取り今日もかからぬままの位置
その後は悟れとばかり話題換え
本心を聞く気一寸は怒らせる
世帯ずれ好んでなった訳でなし
大阪市　木村十悟

ミス日本頑張りますとは何のこと
義務果すように流感内もねる
流感も仲のよいよい隣組
俺一人乗せて初発が突走り
大阪市　伊達堰子

おとなしゆう店番せいと降りつづき
おせっかいの様だが隣も旗出させ
五六軒配る梅田のわさび漬
大阪市　不二田一三夫

長生きが奥の離れで寝たっきり
追加した膳には鰻ついてなし
荷造りがうまく三等社長なり
洋傘が濡れてず嘘がバレかかり
ヌードスター振付どうりに腰を振り
兵庫県　酒井ひか平

橋立の長さ泳いで見て判り
警察の誰が植えたか月見草
水が足らん云うてた事はもう忘れ
大水の被害をよそに釣って居り
名古屋市　長尾越鳥

転んでも呑む呑む呑むと云う職場
人事課長さすが宣伝部に向く娘
宇部市　津秋六花

棒程を願って停年課長まで
蠅たたく初段の構えが大袈裟な
神戸市　野村初市

手八丁口八丁は素顔で来
灰皿はゆうべのままの豆の皮
大阪市　金井文秋

産制の本をはずかしがらず買い
トラブルを治める役に生れつき
岡山県　戸田喜楽

くどくどと用云いつけて妻出掛け
死ぬ生きる云うて貰ったのが別れ
もう死ねと云わぬばかりに看護され
岡山県　池田古心

年よりも老いたり友に会うて知り
掛かるまで待つとは蜘蛛の気の長し
東京都　石居高志

嘘も知り真も知って妻老いぬ
ハッタリが利いて未だに外廻り
でもでもと女あくまで逆う気
漬物の茹子の色にも妻の自負
岡山市　土井雷山

福袋抱いて眼鏡は置き忘れ
先妻は噂以上に若返り
すぐ飛車を取らず名人明日に越し
大阪府　早川清生

住込にやる気PTAへ来ず
洗濯機掃除機女中やっぱり居
てにをはの外カタカナのモード集
決算書社長の帰依の寄附も入れ
日が落ちて明日を刷り出す新聞社
大阪市　西田柳宏子

お人好し香具師の言葉を受け売りし
出身地聞いて飲み手にしてしまい
堺市　辻圭水

見栄などと云ってるうちは金銭があり
留守居だと見たか鼠の大胆な
委員長斗争の口調で挨拶し
前納をさして明日から夏休み
石川県　中松恒雄

パラソルも水着も今年の柄の浜
一疋も釣れない上に雨に会い
資本家に見えたかストのビラ呉れず
台所改善をして粗食させ
滋賀県　中島可十

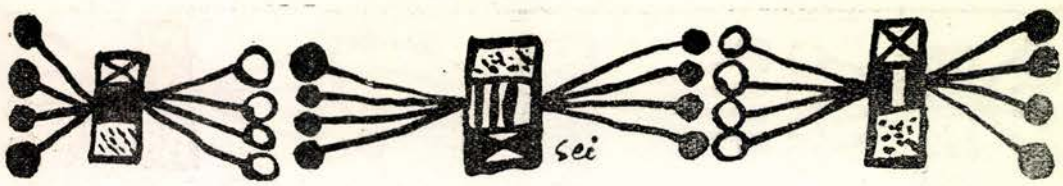
すこうしはやっぱり叱ってほしいなり
還歴のいまだに自転車乗れぬまま
スト知らずまた昇給をこわくいる
女子大出顔のよいのが椅子を抜き
大阪市　児島与呂志

のばしたり切ったり流行の髪忙し
岡山市　野々口美舟

正直なだけ神様もみそなわし
あげ底に乗る羊羹のうすいこと
神戸市　小浜牧人

傍系の赤字へ社長寄り付かず
振り出しに戻り背広に用はなし
独り占めした満足を淋しがり
着飾って出て婦人科へとも云えず
大観の墨が涼しい竹に雨
天理市　菱田満秋

俺よりも会社を信用して飲まし
大自然はいいなあ小便もっと飛べ
お子さんの視線へ茶菓子あまして来
PTA一席ぶてば選挙され
ピンボケになるとも知らず微笑んで
月給日ですよと妻に念押され
いつの間か元大臣になっている



お化粧をしてたにしても待たせすぎ
年寄の意見へちやでもよいと云う
妻だけがもてた話を信じとり
兵庫県　前川左文字

パチンコの親爺は株ですっており
同窓生月とスッポン程違い
口程になかった酒豪へ肩を貸し
お相伴妓器用に口へ入れ
口づけを静かに待っているこけし
岡山県　池上知恵美

エンゲージリングで体しばられる
接吻をまだ熱のあるままでうけ
大阪市　橘高薫風子

地下鉄の匂い都会の夜も更けて
蚊帳吊れば吊ったで淋し独りもの
看護婦の恋門限を口に出し
下関市　中村九呂平

着流しへ素足が憎い程うつり
いい心臓ですなと歳を又聞かれ
下関市　多田ほなみ

お前だけではないと病院安堵させ
海水着の影も淋しい四十代
大阪市　池戸桃村

アラ嫌よとは靴下をぬぐ姿体
白髪抜き合って入歯で笑い合い
大阪市　西川晃

説伏に来たとは知らずおいでやす
大穴を逃がした話ばかりなり
しつけよく育ててくれて覇気がなし
赤まむし飲んでてらてら気味悪し
自己過信教祖のような口を利き
買収の効かぬ閻抜を煙たがり

刑務所の広さ我家をふと思い
鳥取県　田中蛙眠子

労基などふふんさくさく露を刈る
酒・ネストン・シロン政治は多忙なり
ステテコの旦那が打ったホームラン
名古屋市　野田一念

虫好かんなもと哀れに振られとり
ガム噛んでうっとり人の恋を見る
面貸せと顎で呼出すサングラス
大阪市　山本立児

十二貫裸になれぬ夏が来る
お夕飯の仕度まだですテレビジョン
岡山県　林奏丘

供養塔ガイドすらすら読んで見せ
福々しい顔が金借る邪魔となり
チヤンバラへ親父の方が興奮し

同舟近詠

外務員碁のお対手も役の内
世に馴れてぼかし上手な廻り椅子
法ら貝の曲吹きもする行者宿
松山市　前田伍健

団体の迷い子名物そば屋に居
大物を呼び捨にする政治好き
法律を笑いかつぎ屋よく稼ぎ
土産屋で時間を潰す乗り遅れ
長野県　高峰柳児

結婚後つまり人生下半期
商売もやはり体力ものをいい
和歌山市　秋月宏方

僕の旅地方新聞にものらず
名人は年期を入れただけでなし
大阪市　石田沐天

ツンとする位でレジスタンス済み
権利だけ叫ぶ天ぷら女史にして
雷同のここにも自称文化人
署長とて神で御座らぬ袖の下
権力はスマン一語でミスもけり
今治市　長野文庫

向う向きのまま替玉が水に落ち
親が親だからと割切られ困り
暖廉より外の遺産の方が欲し
大洲市　米沢暁明

広告を兼ねた入学祝来る
雨降れば雨の旅情をバスガール
今治市　月原宵明

吹けば飛ぶ父だが五人程すがり
心太明治の母の腕を見せ
ふるさとの水湧くところ心太
先生へ祝吟
師の眼鏡光りするどし古稀迎う

新児童ヴァイオリン・サークル
講師　麻生アート
奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地
生駒教室
TEL306バン
西宮市仁川町五丁目七番地
くるみ幼稚園
TEL638バン甲
★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい

水郷句会に出て

――前田伍健先生のこと

東野大八

八月四日私の郷里大洲で、愛媛県川柳大会を催す、という案内状をうけて、他の用事もあり、急遽参加するにきめた。

何さま岐阜から丸二十一時間もかかるところだけに、酷暑の中を子供二人を伴っての旅は、相当に応えた。だが、その疲れも会場に入ったとたん、一度に雲散霧消であった。

まず前田伍健先生が、童顔をほころばせて喜んで頂けた。長野文庫、月原宵明、米沢暁明の川雑三羽鳥の顔もみえ、あれやこれやである。文庫さんは、いつみても同じ顔で、同じ声音で、淡々として御年輩の滋味さえでてきた。宵明さんは、今治から松山で、大いに川雑やら路郎先生の話が出たりして、気分は多分に、お歳と逆行の気味があった。暁明さんは、山門の僧兵みたいにクリクリ頭で、持前のヒョウ逸味のある話ぶりで、路郎先生が二日も宿にみえられて、がいに恐縮してのう、と改めておそれ入った顔付。

水郷川柳社の総師今川椋影さんも、会場へ、路郎先生の描かれた自画像を出品して、心うきうきである。黄色い紙の色に、歳月のサビは申分なく、描かれた顔も若々しく、「椋影さんのつもり」とある、先生の賛も、生々とした筆跡が感じられる。

この鮎は、藤樹先生も食べた鮎

の先生の一幅が、立派に表装されて、かたわらにかかっている。中江藤樹を出した大洲人からみれば誠に申分なき名句である。語り伝えて、私も承知していたが、その話の色紙を拝見するのは、今日がはじめてである。

これらの人々の他に、愕いたことには、番傘の平松圭林氏と正に二十年ぶりの対面であった。

北京はナニワホテルで、この人と会ったときは、紺の背広にロイド眼鏡の、さっそうとした青年紳士だったが、今はどっしりと中年の重役タイプである。目下NHKの松山放送局の部長さんである。いろいろ昔ばなしが出た。北京のナニワホテルは、和田黙然人さんの経営で、そのときの句会には、森東魚、石原青竜刀、松尾小女郎石川長介などの一騎当千の柳人が顔をそろえたものであった。圭林さんと話しているうち、そうした日のあれこれが、無限の感情のうちに押し展る。

伍健先生の柳話を、八年ぶりにきいた。相変らず、うまいものである。先生と二人で、松山の国立療養所へ講演句会に出かけたことも思い出されて、この先生の柳話が、この日の最大の収穫でもあった。

一堂に柳人が会して、よもやまの話をする。その雑話の中にこそ本当の風交がある。県下大会という催しの喜びは、句作を別にこうした逢う瀬を、お互いの間に持てることだ、と私のことにもふれられて、きくこちらにも、先生のそのお人柄の温かさが、胸底にまで流れこんでくる。

伍健先生の柳話には、この日だけでも、私に幾つかの、心に銘記すべき事柄を述べられた。

おれに似よ、おれに似るなと子を想い

の路郎先生の句は真。

骸骨のどこに小町の花の色

の飯花坊先生の情。

白鷺の雪しんしんと青きまで

の三太郎先生の美。この真情美こそが、川柳の真髄であって、老年期の俳句とくらべて、青年期にある川柳の面目が発揮される。そう語られたのち、句評のことに触れられて、句評は、人をほめるに三通りあるが、その中ほどの程よきものでありたい。たとえば

「奴さんは酒を飲むが仕事もする」

というのと

「奴さんは、仕事もやるが酒ものむ」

というのをくらべるとよい。つまり酒と仕事の配置がちがうだけの同じ様な言葉だが、受取る側の気持というものは、うんとちがったものになる。つまり、仕事の後に酒をつける方が、その人の人格も手腕も傷つけない。ものもいい様である。そういって先生は、小西得郎さんの、野球解説の巧みさをあげられるのである。

「あの名手誰それにしては、どうしたことでしょうかネエ」

この、相手を立てての批評こそが、川柳人の心やり、川柳人の味だといわれるのである。

また、三太郎先生とむかし大州で会ったころの話も出た。

川柳の味と川柳味のちがいから川柳説法の道を「石にも説く」という三太郎先生に「石にも聴く」という説の伍健先生の雑話が、結局、このことばは、かみしめれば一つであった、ということの話など、大いに傾聴すべき話の連続であった。

八年ぶりの水郷の句会。私は、今も故郷の句会を通して、川柳人間界の温かさに、しみじみとした幸せを感じているのである。

川柳文学の再検討（二）

田中辰二

もとより連歌はその何れを問わず一人でまとめる短歌と違い出題めいた前句又は後句の意に添わないものも出ようから原句者の考えた余情が破壊される事も多いであろう。この事は今川了俊の「落書露顕」（新校群書類従巻二九六所載）にも見える。短歌と雖も短詩形である限り丁度簡単な描線や色彩の濃淡である雰囲気を醸し出す絵画芸術にも似て紙背に又言外に幽玄美なり有心美を追求する時代の要求としては連歌にも

「連歌の道も亦かくこそ侍らめ。かまへて〳〵数奇の人には先づ幽玄の境に入りて後ともかくもし給ふべきなり」（「筑波問答」新校群書類従巻三〇三）

或は

「歌は十体を本として廿八体など申すこと侍るにや。連歌も十体ばかりは侍るよし宗砌申し侍りし。愚意にその数を分ち侍らんことゆめ〳〵あるべからず、たゞ何となく長高くして幽玄有心なる体肝要候歟」（「吾妻問答」仝上）

ともあり「さゝめごと」上（新群書類従巻三〇四所載）にも恐らく「三五記鷺本」（仝上三〇二巻所載）の説を借りたのでもあろうと思われる十体をあげているし心敬の「老のくりごと」、宗祇の「老のすさみ」にも、和歌との接近を図ってはいるが、畢竟連歌は連歌で独立した三十一文字の短歌では無く時に一貫した余情を出し得ても、多くはそんな事は望めないで別箇の句の寄合という色彩が濃厚で只両者をつなぐ機智に重点が移され全体から醸し出す雰囲気よりむしろ言葉の綾に興味をひかれなぐさみ中心になり易いことは是非もないことであった。なぐさみが中心になるに従って相手の機智を試すべく難題もかけられる。題材や表現にこそ抑制があったもののこの傾向は有心も無心も同様である。がなぐさみ、機智の伝統を強く生かしたのは有心より無心の俳諧連歌にあった事は勿論である。その俳諧も正連歌へ、正連歌から短歌へつながる道として門弟を導こうとしたのは幽斎門の松永貞徳であるが貞門では正躰なき句を排撃し又用附同意を禁じたことによって二句で一首の和歌を構成するのに反し各句に独立性が要求された。この独立性は延喜天暦の頃から漸く文献に見え初める前句附形式の連歌に既に曙光が見出されるのであるが確立までには至っていなかった。各句が独立性をしっかり持って来ればその独立句と独立句のつながりが次第に心附や匂い附に展開して行くコースも考えられる。一方貞徳は俳言なるものを主張し漢語俗語など在来の風雅な和歌に用いられなかった用語を強要したしそうした拡張した練れていない語彙で従来の和歌のような掛詞や縁語めいたものの形式を踏襲することによって徒に駄洒落めいた感じさえ与え言語の俳諧に陥ってしまう事に気付かなかった。しかも俳諧が和歌に入る門と信じた彼は子弟に源氏物語やその他の古典を素材にすべく研究を慫慂した。彼の高弟たる北村季吟が独創的では無いまでも多くの古典註釈書を作って世に稗益を与えた事は衆知の事実であり又俳諧入門の好資料として「山の井」「増山の井」「続山の井」などを編述したことは高瀬梅盛の「便船集」（寛文九年刊）、「類船集」（延宝五年刊）土佐の皆虚の「世話尽」（明暦二年板）などと共に一面に後の俳文にもつながりを持つものとして注目されていゝと思う。一時全国を風靡した貞

門の俳諧は宗因の談林によって勢力を失墜したが「我仏尊し」の貞門派の俳士と論争を繰返すのみか、自由性あるが故に談林派間にも反目嫉視があってやがて正風の確立と共にこれも勢力を失った。談林が貞門より数歩飛躍したこと、だがやはり心の俳諧には成り切らず詞の俳諧に終ったこと、思い切った表現、歴史伝説の歪曲、グリハマの修辞等々のことは平凡な文学史にも記されているから衆知の事でもある。此の宗因も素養のある俳士であったことは貞徳と同様であるし殊に武士として嗜んでいた謡曲が多くの古典に於ける美辞麗句の宝庫であるのに早くも目をつけていたのである。謡曲などの素材であった古典尊重は精神に於て認められるが謡曲を高く取り上げたのは同じく武士の出身である浄瑠璃作家の第一人者近松門左エ門などと共通した点の一つでもあった。

儒教の知足安分的の教養と士農工商の階級制度を徹底せしめた江戸幕府治制下では都会に対立する武士と工商を含む町人階級では趣味も生活様式も教養の度も最初は相当に開きがあったのは諸藩で夙に武士の為に藩学を奨励したことも与って力があったのである。経済生活の実力の差は兎もあれ直臣でも陪臣でも町人風情を眼下に見た武士は伝統的、保守的であり、教養は低いが富を増加した町人はむしろ革新的、進歩的な所があった。琴に対する三味線音楽、能狂言に対する歌舞伎狂言、漸悟、頓悟的な北宗画、南宗画に対する色調の濃い浮世絵と云った対立を見た。これも吾人が夙に世に訴えた所で殊更新しい所見では無い。その趣味の相違を誇張化した説話は江島其磧の「世間娘容気」（享保元年板）二の巻「世帯持ても銭銀よりも命を惜まぬ侍の娘」などに。又町人等が致富の後つとめて武士に近づこうとする説話は「惣じて大阪の手前よろしき人代々つゞきしにはあらず。大方は吉蔵三助がなりあがり、銀持になり、其時を得て詩歌鞠楊弓琴笛鼓香会茶の湯もおのづから覚えてよき人付合、むかしの片言もうさりぬ（「日本永代蔵」巻一「浪風静に神通丸」の条）はじめ浮世草子の所々に見える。此の数えられた中で特に趣味のひろがりを持ったのは太平の代にふさわしい能狂言謡曲であり裕福な町人もこれに親しむようになって来ていたと見られるべき記録類や文献は沢山見出される。社会のインテリ階級に立っていた多くの武士が謡曲のような保守的なものを愛好しその幽玄味その夢幻味を慕うよりは、その詞章に精通しこれを機智方面に応用し得るという事は大切なキイポイントの様に思われる。一概に川柳という軽文学が盛になった直接の動機は京阪や江戸での俳句、俳諧連歌の流行に平行して河内、和泉、大和あたりの好士が前句附と銘打って六句附と称するものを募集したり板行した事に基くだろう。（元禄九年板鶴寿軒良弘編述「俳諧高天鶯」（一名まめ男）序参照）一方俳諧の方では貞門・談林・正風と次次に推移を見たがそれ等俳士の中でも伝統を墨守するもの、新しい派に媚を呈するもの、鎬を削るものなどにより一栄一落して一介の名の知れぬ点者として終ったものや万句合式のものを出して名を知られるもの等各種各様で前句附集や撰集など多数に出板もされて愈々隆盛の機運を助長した。これは

「近代は点者国々にみち〳〵たれば名もそれと知られたく我ねらふ所の一躰もまぎれぬやうに人に思はせ又は五わり増のたよりともなさんと点者の集を出すはことはり也。歴々の編集なども近ごろは見ゆるが点者の相談もなく我まゝに板行させて家来筋にいひつけ書をうらせて板料のたすけとす」云々（元禄十五年板「花見車」巻一）

と京都住の轍士が書いたらしい文章に我田引水の所はあるが割引してもそれと頷かれる程の文献がこれを裏書しているようである。此の「花見車」には京都は諸国人の集まる所で富有なものも多いが四季遊山の所も絶えないので「貞徳・立圃・重頼出生の地なれば俳諧はたへねど、とりしめて一筋に心をよする人まれ也。さるにより連衆にひしと事を闕」と述べ、大阪は「参会も江戸に似て点とりにかたぶく。点者も今は出座金百疋とさだめたれば会合も行儀に文合おしたて作法のよきは此地也。初会をつとむればみな〳〵懐中より一包づつ扇子にのする也。しかれどもこの比は連衆が大かた点者に成て暁方の目ばりのやうにとほ〳〵として点者斗やのこるらん」と轍士自身の属する派の基地讃美と同時に雨後の筍の如く点者となって勢力争いをし墓穴を自ら掘った談林派の醜い面をそれとなく告白している。かくて近畿から起った軽文学が漸く文運昌んならんとする江戸、殊に芭蕉死後乱れかかった蕉門が其角末流の江戸座の結集により勢力をもりかえした径路を想像せしめるのである。

川柳家の二十四時

（15）

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の銚子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 ―編集局

大阪市 須崎豆秋（すざきとうしゅう）

★一時――熟睡。
★二時――
★三時――
★四時――
★五時――
昔の侍が、枕元へ刀を置いて寝たように、句帖と鉛筆とを置いて……。
★六時――起床、冷めたい水で頭を洗う、ついでに顔も洗う。
NHK朝の音楽をききながら、とろりっとした、お雑煮二杯の朝食。朝刊を読みながら、タバコ二、三本。
★七時――ニュースをきいて、家を出る、乗車時間三分という気楽な電車で出勤。
★八時――事務を執る。
★九時――
★十時――
★十一時――
★十二時――

昼食は冷しうどん一杯。
★十三時――
★十四時――
★十五時――残業のある日には、おやつに牛乳とパンが出る、牛乳は飲んでしまうが、パンは残業で帰りが遅くなったという、証拠品として家内へ持って帰えることにしている。
★十六時――
★十七時――
★十八時――
★十九時――
残業の時間、工場の機械の音に距離があるので、静かな事務室で、独りっきりの二時間だから落ちついて川柳の勉強をする。
★二十時――
★二十一時――
★二十二時――
★二十三時――
★二十四時――
呑み友達があると、大切なパンを持ったまま、スタンドで呑み歩いて、のんきなオッサンになってしまう。
まっすぐに帰った晩には、ラジオをききながら、新刊雑誌を読んだり、手紙を見たり、返事を書いたり、実におとなしい善良な主人だ、寝る時刻は決まっておらず。

金沢市 森下冬青（もりしたとうせい）

★一時――六時。
写真を見られると、洋館建の家に住んでいるが如しであるが、さにあらず、これはある料理屋の応接間である。俗に云う九尺二間の裏だな住い。拙者はその住人である。
かかるが故に、ブル住いの夢を見ることもあり、はかない限りである。おして知るべし。
六時半、起床。塩で歯をみがく沢あん、ほうれん草のしめたので朝食を済ます。
★七時――九時
昭和二十六年の一月頃から神経痛を病み、本職の染画工の筆とりも儘ならず休職、他人から職業はとたずねられると、うっかり「川柳作家」と返事をする。
収入は煙草銭ぐらい、税務署の

世界最高水準の本格ビール
アサヒゴールド
特製アサヒビール

長崎市

池田可宵（いけだかしょう）

対象にならず、この三時間は新聞を読み、その後掃除夫をつとめる。

★十時——

★十一時——

★十二時——

金沢柳界では、冬青は坊主になったの噂飛ぶ。火のないところから煙りたたず、これは認めるが、坊主になったのでも、勿論坊主を職としている訳でもない在家教壇の機関誌編集。只ちょいちょい法話に行く、ここらが噂の種になったのであろう。宗教機関誌編集、新聞柳壇、雑誌の選をやる。屋食パン二個、又は牛乳一本である。

★十三時——十九時。

映画に行く（ただし二番館）終ると友人を訪う。帰れば夕食、刺綱いわしを一家五名で膳に付く。かって故西本三笑さん宅で八年前だったか、麻生路郎氏が刺綱いわしを珍らしくて甘美しいと云われたことを思い出す。実は此頃の刺綱いわしは、放射能の関係か？　うまくない、それも抽者ばかりの言葉ではない……晩酌はやらない。

★二十時——二十四時。

今夜は作句を十句程、苦作する次「蟹の目」六十一号の編集にかかるが、中途にして寝床に入る。横になって肩のこらない雑誌などを読み、一時になんなんとしたまでは意識はあったが、その後不明、所謂ねむりについたことになる。

★一時——

★二時——

★三時——

川柳のれんが世に出たので、展覧会用、物産展用、デパート用雲仙温泉用と注文が重なった時は一時二時まで描く事が一年の三分の一位い、そうでない時でも一時は就寝時、クラブ歯磨。

★四時——

★五時——ねる前に歯をみがくので朝は使わず。

★六時——布団の中でラジオを耳に新聞を見て

★七時——七時半に起きる。

★八時——朝食は米食味噌汁、のれんを何枚か必ず描く。

★九時——

★十時——

★十一時——

昨日の川柳と商用の処理にかかる。返事を書くものは川柳が八〇パーセント。もう昼かというように昼食迄の時間が早いといつでも思う、勿論一本は燗けず

★十二時——老女中をおばさんと呼んでいるが、よく好みを心得てくれているので倖せである。

★十三時——

★十四時——

★十五時——

一時から雨の日でも県庁か、市役所か、文化会館か、デパートか必らず出る。

★十六時——

★十七時——

おやつの事にはおばさんが出る幕でないらしい、愚妻か、娘が出す。

★十八時——

★十九時——

六時過ぎが夕食、燗はつけず冷酒をブドウ酒コップへ一杯のみ

★二十時——

★二十一時——

★二十二時——

組合を二つ、町内会を初めとして会を七、八つ持っているので何かがある。時には三つ位ダブル事あり、文化協会か関係団体の事、川柳ながさきの事で、ラジオの娯楽番組を聞いた事なし

★二十三時——

★二十四時——

家にいる日はのれんを描くのに追われて自由の時間が全く無い溜息をつくが、それでいて決して不満はない。

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

熱帯魚蝶よ花よと云う暮し　石川県　同村虹要（都三天改め）
とれかけのボタンのようなハズバンド　同
平和平和奉公袋に入れた種　同
押売りの件から女中見直され　同
看護婦が来た来た一合びんかくす　同
家出して来た妹へ借りが出来　同
バス峠いくつ越したか聞き合せ　岡山県　太田蓑流
老らくの恋には星がまたたかず　同
絵馬堂へ軍国主義がはげ残り　同
いがみ合う夫婦へ風鈴鳴り続け　同
老人のパーマ頭が軽いそな　同
バタ落ちてから組合へけちがつき　同
使わない金を女の外出着　奈良県　吉田凡茶
宿直のラジオは聞いてない将棋　同
お噂はかねて課長の酒の量　同
世渡りのコツに碁石の黒があり　同
住宅の籤へ家相は云うとれず　同
呼び捨てにされ宴会の係長　同
下っ端を欠伸と共に下らせる　守口市　大谷月都
湧き水の甘さも知らずジュース呑み　同
番号で呼ばれる程に不倖せ　同
字の読めぬおばが一番懐しく　同
わびしさは壁の向うの人の咳　同
調理場で仲居胃散を呑んで去に　同
取りこぼす螢は星の中へ消え　平田市　久家代仕男
さるすべりの肌に西陽は落ちんとし　同
嫁ぐまでの気楽さと云うハイヒール　同
がみがみ屋に死なれ家中気抜ける　同
悟っては見たが馬鹿にはなれぬ性質　同
人間も牛も田植の済んだ顔　愛媛県　村上旭童
牛叱る声はまだまだ老いていず　同
稲がよう太る暑さだもの午睡　同
釣に行く暇を見付けりや風になり　同
牛の血を吸いあきた蚊にせめられる　同
借金の増える店だが今朝も開け　岡山市　宗高矢寸志
飲まずに帰してしもた下戸夫婦　同
忙しい音で月賦の家が建ち　同
敷いている筈が心の家出させ　同
子沢山パパが戻って片附ける　同
年順の打順町内対抗戦　大阪市　横田放人
黒星を自殺未遂で御破算し　同
看護婦で老けてこけしを大事がり　同
う飼い見るためにのんでる今日の酒　同
粒までもそろえ隣へ上げる茄子　同
浴衣着て色の黒さがよく目立ち　高砂市　吉原紅月
大ジョッキ月賦の背広とは見えず　同
ビタミンを打って不孝な遊びする　同
南禅寺吟行より
胡麻豆腐竹の箸から逃げ歩き　同
湯豆腐の風味素焼の鍋もほめ　同
青春の頬げっそりとストと組む　兵庫県　永尾永断

川柳とトマト

金井文秋

戦時中疎開していた頃トマトを植えた年があった。元気がよいのか茎からすぐに脇芽を出す、何んにも知らないからそのまゝ育てて行ったら、肝腎の実はほうずきのようなものばかりしかならない。

あとで百姓さんに聞いたんだがトマトに大きな実を成らすには脇芽をすぐに切り上へ上へとまっすぐに育てなければいけない。そうでないと決して大きな実は成るものでないと云われた。

成程そう聞いて考えて見ると、脇芽を育てる事は、枝葉に養分を取られてしまって実の成る元茎が発達しない事になるらしい。

その事も何時か忘れて居ったが十年後再び川柳をやるようになってこの時の事を思い出した。それは先生が何時も言われている事で選句の時いかにして作家の個性を伸そうかと言う事に苦労する。脇道へ行こうとするものや個性と違う句は没にすると云う意味の事をよく聞く。それがトマトを育てるこつとよく似たところがあると発見したからである。

健康が取得養子の口を待つ　同
平安神宮にて
労基法通りに神も門を閉め　同
お先祖を寺に頼んで故郷を出る　同
隙のない姿旦那の来た二号　同
おたいこの帯でいけてる草月流　神戸市　仲どんたく
御住職経のあい間に蚊を叩き　同
のんびりとキングサイズへ育てゝゴルフバッグ階級意識を発散し　同
タクシーのナンバー車券に見る日よ　同
へそくりの結局子供のものを買い　金沢市　能村美佐緒
奥さん奥さんと悪友如才ない　同
おもいきり怒って見たい袖カバー　同
目高かとは失礼な熱帯魚　同
呼出しの電話へ急ぐ姉の恋　高知市　川竹松風
同窓会開けと一升口が云い　同
交番が将棋を差して村平和　同
アルバイトそこから玉の輿に乗り　同
雨続き箱根でパチンコして帰り　大阪市　竹内千里
霧しぐれ富士の見えない富士めぐり　同
彌次喜多で来た湯の街の味気なさ　同
前身はともあれ良妻賢母なり　同
手料理の心づくしは頂こう　大和高田市　岩垣日本村
云い訳にゆき上席をすすめられ　同
食欲は不振すしなら二人前　同
不眠症電車の中でなら眠れ　同
県人会今日は遠慮のない訛り　岸和田市　中野三四郎
履歴書は綺麗に書くが続かない　同
内職が切れて押入れ整理する　同
保護法の家からボスへ袖の下　同
反省会とは名目で酒を呑み　大阪市　広瀬挽朗

ふるさとに自衛隊来た便りきく　同
足組んで女は屑を派手に捨て　同
俗っぽい所だアベックばかり居る　野呂湖鳥
焼糞で飲めば腹痛治ったり　酒宮市　同
蚊いぶしの真直に登る暑さなり　同
掛軸の読めない方を掛けておき　同
どん底の暮しにさえも夏祭り　同
炊出しをよばれて帰った水見舞　神戸市　傍島静馬
押除けて坐ったとは見えぬ顔ばかり　同
御近所の土産を買いに旅行する　同
早指しの名人が居る涼み台　同
鹿寄せの様におやつへ子が帰り　貝塚市　家根抱亭
欲と意地カクテルにして立退かす　同
紙芝居オブザーバーの位置にたち　同
せがまれてなまむぎなまごめたまご　同
小唄振りほめてやろうじゃないかいな　蒲屋市　里田一ン十
花束にポーズ幾度も楽しそう　同
友達にだけ結婚を宣言し　同
用思い出して踊りの手を忘れ　同
百円の下駄から好きな色をより　京都市　藤川沙智子
見物の足も疲れたもどり鉾　同
見られては困る娘の小ジョッキ　同
町内で行くバス代はボスが出し　同
浴衣着て踊って見たい月あかり　天理市　仲野花鶴美
梅雨明けを待たず金魚は頓死する　同
花火ポンポン絶安の気も知らず　同
勝気とは別に男にあまいなり　同
口泡を飛ばし十円値切って来　大阪府　沢田美喜
流行へ追いつ追われつ金が入り　同
サロンパス用意し田植手伝わせ　同
結婚はまだかと暑中見舞来る　同

余り他句会へ行くと句が荒れると言う事を先輩から何度も聞いている。多くの吟社へ投句するのも同じ事だが、個性と言う事をよく考えて自分の句を作ると言う事に努力すればよいのだが、どうかすると吟社の句風に合うように、または選者の好みに合わそうとする為に、自分の句ではない、言い変えれば個性を失ったその作家らしさのない句が多く出来てしまうのではなかろうか。中にはこんな人がある、雑詠へたくさんの句を出してもさっぱり抜けないので句会で句を作る方が楽しいとおっしゃる。句会の句と言っても大会なら知らず、小集などはその会なり来会者のレベルによって選の甘い時も辛い時もあって、自分の抜かれた句でもこんな句がと思う事がある。

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

ポケットへ腹へ疎開をさして　大阪府　谷沢　好祐
値をきいて文鳥やもめでほっと　同　同
ボーナスを待ってたように子の病気　同　同
その次にMのW化がはやり　同　板東千代美
すき髪で来る退院は友を連れ　大阪市　同
一と言も好きと云わない人に惚れ　同　同
奥さんがひらけ過ぎてもの足ず　同　同
白粉の付きさえ悪い日の疲れ　同　同
貯金帳夫に秘密とは淋し　岡山市　福田白面子
まばたきもせず出まかせん事を云う　同　同
軍隊で横着だったのが自慢　同　同
移民して今日からドルの汗流す　同　上林　粗影
古蚊帳を吊れば怪談めいて来る　宇部市　同　上林　粗影
蚊柱の露路へマネキン戻って来　同　同
二度の母なら小母さんと呼ぶよ　同　同
映画になるなと過去を振り返り　同　同
ねむれぬ夜の時計悪魔のささやき　山口県　同　安平次弘道
妻病んで軍隊生活役に立ち　同　同
コーモリ傘振って部長のゴルフ熱　同　同
四月馬鹿気の毒な程母慌て　同　同
借る外に用のないのが来たか亦　尼崎市　徳永　鬼美
お見舞に行けば宗旨がまた変り　同　同
出世とは金で計って味気なし　同　植山　武助
代書屋が役所様様と云う構え　岸和田市　同　植山　武助
泥捧の手練を公開する懺悔　同　同
独酌の父は丸みを帯びた背　同　同
双肌を抜げばバタ屋の良い体軀　大阪市　橋本　雅巣
提灯がいる故郷で暮れかかり　同　同
性格がどうのとスターまた別れ　同　位守正柳子
筆蹟をただ惜しまれて不採用　小松市　同　位守正柳子
銭位まだ生きる高利に頭下げ　同　同

債券も定額もありモンペ履く　同　菊地　紀久
振りむかれなくなって三十路を意識する　東京都　同　菊地　紀久
きき耳を半分たてて事務をとり　同　同
集金は出来ず流感持ち帰り　同　夷石　鼓風
冷房完備閑人ばかり行くところ　東京都　同　夷石　鼓風
テレビまで据えて闘病長期戦　同　同
好演をする程悪役憎まれる　同　同
更年期お顔に惚れた恋を悔い　熊本県　松井野狸翁
バス代に満たぬ下一桁が当っとり　同　同
ニコヨンにつるべ落しの日がながい　同　同
蠅打って居れる子運をうらやまれ　鳥取県　鈴木村諷子
団扇使って原爆の話する　同　同
浴衣着る候には入って若返り　同　同
おみやげを買うといてからはしご酒　天理市　坂下　乙美
お見舞によく来た友に先だたれ　同　同
胸を病む窓辺を春は素通りし　同　同
宿題は眠しナイターは面白し　熊本県　淵川　秀敏
露天風呂螢が来たり蚊が来たり　同　同
花火見の迷子が眠い目をこすり　同　同
ビールのビだけでトンコ節を出し　岡山市　江国　幽谷
殖利法知っているから金を借り　同　同
自殺する薬をオブラートへ包み　同　同
十二月十二日さかさに張って病　大阪市　本多　省三
ためす気の手ぶらで来たをもてなき　同　同
犬の風邪妻の歯痛はほっとかれ　同　同
名前まで替えたに病苦まだ続き　貝塚市　杉本　一鶴
枯木も山のにぎわい署名する　同　同
カーブドロップ直球の手でくびきに来　同　同
アルサロのワイフに職業笑いされ　貝塚市　護川　梢月
ベッドバス湯上りのつもりで着る浴衣　同　同
湯上りへすまんすまんとよく使い　同　同

そんな句を多く作ってて喜んでいる訳ではなかろうが、トマトの脇芽を伸ばして大きな実がならないと言う事になるなれば淋しい事ではなかろうか。句が荒れると言われるのはこんな事を言うのであろうと思われる。句会はあくまで自分の句を作る為の作句道場であってほしい。

私の言いたいのは、他社の句会へ行くだけの熱心さをもっと雑詠に力を入れられないかと思うのです。初心者なら兎も角永年川柳をやっている人の雑詠が見られないと言う事はなんとしても淋しい事だ。句会へも出られない忙しい人もあるが雑詠だけは毎月出して頂きたいと思っている。

数多くの句会へ行く事も他の柳社へまで投句する事も決して悪いと言うのではない。トマトが今日のような優良種にするのには、他種との交配と永年の努力によって成しとげたのだから、他の柳社やそれぞれのよい所を持った柳人と交ってそれぞれの良い所を取り入れ優良なる第二の個性を作り出すと言うのであれば熱心に句会へ行くのも投句するのも大いに奨励されるべきであろう。元茎を伸ばすのを忘れて脇芽を育てる事にならないように願いたい。

トマトによる経験を川柳にこじつけた訳ではないが、唯一つ違うところがある。それはトマトの場合だと少し位実が小さくても、二つ合せれば目方が多くなるから高

子沢山寝させば虫の声となり　西宮市　樋口　舟遊
欠伸しているのに話まだ続き　同　神庭　詩郎
ポマードのいらない年を淋しがり　同　辻　文平
里帰り風呂敷に紐足して去に　茨木市　同　滝井　貴洲
決算の赤字と別な御増築　同　杉本たつよ
二重人格百も承知でいて頼み　同　河井　庸佑
道を訊く顔と煙草屋知っており　大阪市　同　川端東雲楼
洗濯が好きとは女房の負け惜しみ　大阪市　同　岩田十三楼
永風呂の母と行くのを子はきらい　同　内藤きさ子
水害を気にして年忌来てくれず　大阪市　同　土守　蜻蛉
黄昏の色を見ている一人旅　同　同　内藤きさ子
母の名を落書したい雨の音　岡山県　同　遠山　一雨
裏切った人に見せたい高島田　岡山県　同　竹内花代子
口紅もつけずに妻の迎え傘　同　同　山田スミ子
倖はたよる我子が素直なり　大阪市　同　島田　雄峯
成績が下り家庭教師足重し　大阪市　同　干鰯谷和子
利のうすいお菓子が先に売り切れる　同　同　二宗　吟平
遅出の子探し廻って二部授業　同　同　木下　一休
再婚へよき母たらん誓いたて　富田林市　同　塩谷三思楼
泉水のテストと知らず蛙の子　同　同　本城　弦月
田草取る母と別れてハイヒール　福岡県　同　福田　祥男
幸福の図は縦横に子が眠り　福岡県　同　石橋万古人
一二銭の話し故郷の友も老い　同　同　伊原　明林
段取りも目茶苦茶朝の客去らず　同　同　青柳扇子仙
序でには勿体ないが墓掃除　滋賀県　同　槇　水泡
思いきり派手な浴衣を着てドライ　同　同　越智　義夫
ヒステリーなんて知らぬ妻は肥え　兵庫県
九十九まで待てぬ白髪を見つけ合い　東和田市
そうめんが好きそうめんの様に痩せ　同
そろばんに番茶をこぼす会計課　同
新人賞俺も書いたろかと思い　兵庫県

田園都市ここは小便出来るとこ
そそくさと妻に敷かれに帰るなり

麻生霞乃先生へ

鶴亀の扇がのびる金屏風　大阪市
滝の音蜘蛛も淋しくゆれている
つくろうて着てる生活をうたがわれ
団体は飲みつかれたか寝てしまい　広島県
稼ぐ事知らずに育つ娘に育ち
転居して十日目祭の寄附が来る　大阪市
宿題を出した先生の坐り込み
幸福の女神とやらにまだ逢えず　泉佐野市
家計簿の辻つま合わす茶漬食う
授業料子供は猶予してくれず　岡山県
弱い子の順に流感拾って来
スピッツと生活す老後を保証され　和歌山県
現実の淋しさ家出してわかり
儲けてる噂否定もせず儲け　石川県
席ゆずる勇気もなくて眼をつむり
麻雀をやらせば別な人になり　西宮市
先輩のノックも予選の近い音
公然の秘密があって嫁き遅れ　岡山県
母ちゃんの居る間は泣かず遊んだり
涼み台妻は星より金のこと　出雲市
片手間の方が俺より余計とり
雨足へテンポが狂うハイヒール　玉野市
夕涼み二人の恋へ風が来ず
習作やなんてもったいない画題　大阪市
貧乏神ぼくのどこかが好きとみえ
喧嘩する言葉もあった京都弁　愛媛県
慰めてくれて助力はしてくれず
水打てば変った味の風が来る　今治市

暖簾

木村十悟

「大阪商人こゝにあり」と、心に大きく叫んで雨にさらされ、陽にあせたのれんを抱いて、一トすじに昆布と取っ組んで、転んでは起き転んでは起き、命を魂を打ち込んで浪花屋ののれんを守り抜いた人、吾平。

◎いのちある句を創れ◎こののれんを破るまい、汚すまい。雨の日も風の日もノート一ぱいに、創れ創れ。私は駈出しだが、脳は少しいけないながら、へたばらず創ろう、其の内にまぐれと言うやつにぶつかるかも知れんから。

大家の諸氏、新進の諸氏よ、いのちある句を創れ。この、暖簾を守り抜くのは君だ。この、暖簾に魂を入れるのは君だ。

五尺そこそこ

関すゞ女

田舎バスながら朝夕はもみくちゃに変りはなくそんなのに乗り合せると〃満員車六等身は親ゆずり〃と嘆き直さざるを得ない次第

く売れるわけだが、川柳だと特別優れた句だけしか後世に残らない事を考えると、八十点の句十句は九十点の句一句に及ばず、九十点の句十句は百点の句一句に及ばないと言う事だ。

お見舞の愛情手づから活ける花　福岡県
二女に踏み三女は跨ぐ世に育ち　福岡県
補助椅子に座ったような土曜事務　金沢市
一人漕ぐボートやけくそ気味になり　金沢市
カメラ買うたので旅行がしたくなり　大阪府
面会の帰りに映画見る着物　大阪府
裏街の神武景気へ貸切車　大阪市
キズ物と書いた品物先に売れ　大阪市
冷酒は目が廻る程酒がへり　守口市
遠耳の炊事の音はよくきこえ　守口市
やぶ入りにボストン提げる中ヒール　宇部市
結核の散歩うらやむ小百姓　宇部市
駐在も裸暑さに負けており　大阪市
歩くとこ多いかと聞く都会人　大阪市
意地でもと思った意地が又へこみ　枚方市
親馬鹿は瓜に茄子を生ませる気　枚方市
一丁で豆腐屋四遍も礼を云い　大阪市
新郎はフライ新婦はヘビー級　大阪市
養子向きなどと勝手にきめており　岡山市
生理休暇とれる勤めを羨まれ　岡山市
幸福のおこぼれ猫に話しかけ　伊丹市
日に何度往診したが振りむかず　伊丹市
南無幽霊テレビにも出る忙しさ　宇部市
ため息をつけばビールのほしい顔　宇部市
吐き捨てるように云われて愛し　岡山県
姦ましい口は朝からもう動き　岡山県
一人いるお部屋は梅雨のかびが生え　山口県
浴衣着て女にかえる夕涼み　山口県
こんなとこで逢うて世間をせまくする　新潟市
病む胸にわけを話して座をはずし　新潟市
能弁を買われ代理のモーニング　同
アベックへ祇園は夏の灯がはいり　山口県
藪入りへ無理をしたとも云いそびれ　河内長野市
苦節三十年未だ前職の夢を見る　河内長野市
足音にまで神経を高ぶらせ　同
展望台働く人も美しい　小松市
そうもしておれぬと女腰を据え　同
軽蔑を受けそうで浪花節を消し　大阪市
冷房の社が有難い日曜日　同
たまさかの雑炊子供舌皷　笠岡市
飲める友雨読のプラン変えちまい　笠岡市
方円の水に続出する被害　大阪市
邪魔になるラムネ玉にもある役目　同
跡をとる気の子はおらぬ小百姓　笠岡市
おっさんが水筒持つと酒に見え　同
善人の心にかえり滝の音　松山市
生ビール税金程の泡を立て　同
春夏秋冬闘争にまでスケジュール　京都府
黙否権だけは覚えて手古摺らせ　同
末っ子まで父の愛人憎んどり　天理市
呑まないを話せぬ奴にしてしまい　同
六才で柄を気にする子に困り　大阪府
お祝をだぶらぬ様に割当し　同
ここまでは名人戦の型に指し　鳥取市
上に厚く下にうすく昇給査定すみ　同
終電車アロハ着たのが横になり　堺市
ガム噛んでボーイフレンド心待ち　同
何処へいて何を見るのか汽車の客　奈良県
ハンストで取ってボーナス飲んでいる　同
頓死する人を倖とも思い　ホノルル
日本語の土人に石鹸買わされる　ハワイ

原田　綾女
同　森本黒天子
同　村井　城南
同　小島さぎす
同　佐内　隆文
同　米浪進之助
同　木山　遠二
同　松木　窓城
同　塚脇　笑太
同　岡田花奈女
同　田中バンビ
同　北村　三歩
同　赤塚　楽天
同　木村よしを
同　友保　斧平
同　満生　拝山
同　阿部たけし
同　山田　圭都
同　丹波仲字呂
同　安並　十七
同　藤冨　淀月
同　平田　実男
同　吉川　悦子
同　草深　酔升
同　冨永　建朗
同　光好　陽子
同　小川静観堂
同　鎮浪　錦花
同　杉田　明美
同　前野　美保
同　久米奈良子
同

満員御礼の映画館――、これが一番傑作で遅く参じて溢れるようなお客さんでも平気で結構いい場所で観て帰れるのである。

あらかじめ断っておくけど潜行法？や、タックルでもってじゃんじゃん人前に出るなどと言う元気は持ち合さない。だが、美人ではないが私が小さいので、前へ出してくれてもご自分は見えるので「前へ出なさい」と云ってくれる。そこでツカツカと前へ出て最前列へ行ってしまう。後はイスのあくのを待つだけである。六等身またよきかなである。

扨て「俳句やってますの」と言うと「そおお、むずかしそうね」「川柳創って――」「へェ」「面白そおネ」と来る。勿論面白いけれどその言い振りから察するにへェはその後へぢむさいがつきそうな調子だし面白そおネは軟かい句を連想するか一口漫画の気のきいたのを意識して茶化しょるらしい。

川柳はれっきとした短詩形文学である。作品を通して作者の経験や思想が鑑賞者のうちに再生産されなければ芸術として意義がないとすれば、作者自身が句の解釈をつけて初めて深く理解されたり或は作者の世俗に於ける地位に依って句を価値づけられたりする俳句の比ではない。なのに川柳には芸術院会員もいなければ芸術院賞の授賞者も出ない。

新聞などでは娯楽面に毎回位置

お世辞とも思わす程に牛をほめ　ハワイ　宮政　周防
倖を希い昼寝がしたくなり　兵庫県　松本　一九
から梅雨にハイヤー次のブランコ立て　大阪市　中谷ハナ子
靴磨きだけは紳士と呼んでくれ　玉島市　秀川　永平
相談をすればうんうん頼りなし　石川県　斉藤　巌
こま切へなまじ輪ゴムの音が派手　富山県　関　すゞ女
ストライキ首のないのがケシかける　荒尾市　平田　一柳
夜店の植木夕立程水をかけ　西宮市　松島　光一
幸福の数膝に抱き背に負い　大阪府　林　昌男
協議より服地の批評婦人会　兵庫県　藤井雅佐女
浴衣着る夜もなく母へ秋が来る　姫路市　中田　白李
香水の匂いにもよう満員車　今治市　越智　一水
食うだけは食って夏痩したい愚痴　倉敷市　荒木　狂風
金婚を祝う子夫婦孫夫婦　兵庫県　前川　越山
停年に聖人らしく花造り　群馬県　荻原　竹郎
子と共に戯れ四十の動悸する　岡山県　岡崎　一也
買わぬ気で来て持てぬ程買うてい　奈良県　秋田　好子
本当は曲線美見に来た浜辺　新潟県　高野むじな
それからの女公私をわきまえず　大阪府　井上美恵子
テレビ買うて泣き虫がガキ大将　名古屋市　藤沢不二郎
汽車の客クイズへ智恵を貸したがり　田辺市　室井八九寸
そんな馬鹿なと否定して吃り　河内長野市　大杉　春吉
祈禱師にまかし切れぬか医者が来る　広島県　山内　俊児
非常口錠錆びたままバスは無事　石川県　松高　秀三
担ぎ屋の腰に株主優待券　石川県　高瀬　幸路

六手術を前にして

見おさめと思えば青空更に青し　松江市　板倉　三文
執拗な女の様な風邪を引き　高知県　高橋　蟠蛇
無駄足を何度も踏んで夜逃げされ　宮崎市　野口卯之助
標準型なのか運勢よく当り　岡山県　鎌田　銀子
のど自慢上には上のある美声　熊本県　永松　道雄
話し声もうきうきとして退院す　西宮市　村上　珠絵
雨の日を心行くまで安静し　松江市　本田　稔
アベックで今度は来なと宿の世辞　宇部市　神田　豊年
不仕末を何でも療養ぼけにして　貝塚市　田中　千鶴
夕風に坐り直した釣天狗　西宮市　湯田まこと
就職が決まれば社説など読まず　西宮市　河相すゝむ
熱い目と見て看護婦は逆らわず　貝塚市　小田　柳叟
キャンデー屋炎暑へ嬉しペタル　笠岡市　出原　真奇
字も枯れて我が折れて来た停年期　大阪市　堤　勝三
何も入らぬと云う病人に気が疲れ　小松市　万仲　一進
餌を食うだけで上手に鮒は逃げ　松江市　岡崎　祥月
商才に長けてお医者の頼りなし　大阪府　榎本　甚録
叱ってと云いつつ妻が子の味方　鳥取市　岩田八文銭
死の抗議三段抜きで派手に出る　玉島市　井上　旭峯
見栄坊が名刺に呼出電話刷り　名古屋市　細川　千草
へつらい僧極楽へでもやるように　石川県　中町　三平
忘れねばならぬと渦をなおみつめ　日祥市　有川　光夫
ゆかた着て飲み代金を握り来ぬ　東京都　奥　比呂志
子沢山達者なだけがただとりえ　西宮市　酒井　丹謡
落ち潮へ逆うようなもやい舟　善通寺市　橘　十四呂
アルサロでカリブソ娘と差ゝ飲み　高柳市　高木土佐太郎
古稀と聞きにわかに翁らしく見え　岡山県　塩飽　素峯
汗ながして特売あさりの妻さがす　大阪市　平野　一兆
子沢山ボロ畳でも無頓着　西宮市　三上　芙路
質店で顔がきくよな母をもち　大阪市　小竹　史子
仇花のような委員にかじりつき　笠岡市　谷本鈍愚坊
ボーナスをポケットマネーにちょけずり　豊中市　小林　山舟
研究と云い云い昼寝まだ続き　愛媛県　河本南牛子

路郎先生の古稀祝賀川柳大会に「ふあうすと」や「番傘」では二百越したとか、三百近いとか書いているが、四百越したとは数読みができなかったようである。雨さえ降らなかったら五百は軽くオーバアしたのにと、口惜しがったのはボクだけではなかった。

こんなこと、物の数ではないので、ホットイテもいいのだが、とかく、モノ数もクチ数も多いのがボクのわるいクセで。ちよいと穴埋に手数をかけたまで。

も句数も定まらないまま掲載される。川柳はあくまで大衆が大衆を対象とした庶民文芸であるからそれでいいので駈け出しの私のヤブニラミなのかもしれないが。

とに角、世間一般から考えて何だか〃五尺そこそこ〃と云った感じのする川柳を、古稀の今日までいつくしみ、倘挺身なされる路郎先生の御苦労を偲び、唯々頭の下る思いがするのである。

○青ペン ●赤ペン

（一三夫）

來た便りも　往く便りも

川柳雑誌社特製

投句用　柳箋

一冊（五十枚綴）三〇円

送料（一冊分）八円

特別課題

夫婦

1957年度
優勝作品決定

麻生路郎先生選

路郎賞受賞句（一席）

夫婦連れ車中は何も話さない　川雑本社　西いわを

有名も無名も妻は考えず　川雑池田支部　戸田古方

妻君に手綱を持たれよい夫婦　川雑本社　大坂形水

妻君の膝へ汽車弁置いて呑み　川雑岡山支部　津田麦太楼

二席

ビヤホール妻の背中を押して入り　川雑阿倍野支部　高鷲亜鈍

三席

あっさりと折れても妻の気に入らず　川雑広島支部　山田季賛

佳作（順不同）

夫婦して出るへ子供等世話をやき　川雑淀川支部　加納山茶花

子も孫も出して夫婦で海苔あぶる　ふあうすと川柳社　延原句沙弥

人前は夫唱婦随の顔でいる　川雑交通局川柳会　北川春巣

足の蚊を叩いてやるも夫婦なる　川雑小松支部　山上千太郎

十六と云うに夫婦にしてくれと　川雑三養支部　和田登志子

老夫婦互いに一人よう出さず　川雑阿倍野支部　伊達堰子

老夫婦御二人様にちょっと照れ　川雑淀川支部　西森花村

前抜（順不同）

淡々として老妻の酌を受け　川雑淀川支部　若本多久志

倦怠期などと芦屋に住みながら　川柳文学社　堀口塊人

ぼろくそに言える妻あり有難し　川雑本社　藤田和笛

夫婦だとはっきり見たりバトロール　川雑本社　柳沢成行

糟糠の妻をいたわる暇もなし　ふあうすと川柳社　越中今雨

教養が夫婦を冷めたいものにする　川雑阿倍野支部　河井庸佑

私よりいい人でしょと妻が妬き　川雑堺支部　八木摩天郎

ともかくも夫婦機械のように生き　川雑阿倍野支部　不二田一三夫

年上を意識せぬほど妻も老け　川雑大鉄局支部　正本水客

うらやましいような夫婦に子が出来ず　川雑本社　松村笑司

間借りでも思いを遂げた夫婦なり　川雑婦人友の会　久米奈良子

皆探がせ死んで夫婦と書いてある　川雑阿倍野支部　伊達堰子

気のきいた女房で年齢は一つ上　川雑本社　里田一ン十

男だと決めて準備をする夫婦　川雑阿倍野支部　多胡逸人

老夫婦明日はどの孫抱きに行こ　川雑交通局川柳会　橋本雅巣

秋の灯に子の無い夫婦茶を入れる　川雑本社　喜多春秋子

夫婦者も混じり相当なスリ一味　川雑本社　田中平十呂

夫婦やがてもの言わずとも通じ合い　川雑本社　大谷月都

どちらからともなく夫婦去に仕舞　番乗川雑社　鵜飼蟻朗

女傑まだ夫がいたを忘れられ　川雑大鉄局支部　永尾永断

心臓で行けと夫婦でのど自慢　川雑池田支部　菊田いさむ

風鈴を買うさえ夫婦して出かけ　川雑婦人友の会　内藤きさ子

夫婦だからこんなくせでも許しとき　川雑婦人友の会　岡田花奈女

倦怠期なかったような老夫婦　川雑三適支部　酒田清子

夫婦仲長屋の頃がなつかしい　川雑本社　中野三四郎

子を寝かせ夫婦して飲む氷水　川雑本社　山本立児

許される日を信じてる共稼　川雑淀川支部　木村水堂

信じつつ叱り信じつつ口答え　川雑本社　寺井鋭々

目出度さは夫婦の胸の大リボン　川柳文学社　堀口塊人

競争で孫の気嫌をとる夫婦　川雑淀川支部　加納山茶花

アレ持って来いで用事の済む夫婦　川雑本社　岡田某人

フラッシュへ金婚小さくかしこまり　番乗川柳社　木幡村雲

満ち足りた顔かな孫をだく夫婦　川雑婦人友の会　藤村〆女

老妻も古稀へ一とさし舞うてくれ　川雑阿倍野支部　松江梅里

夫婦連れ遠慮気兼ねもなく値切り　川雑三適支部　西田柳宏子

退職金それから夫婦土に生き　川雑本社　堤勝三

古稀祝う弟子の夫婦が汽車でくる　番乗川柳社　岡崎はるを

夫婦ともめがね拡大鏡がいり　川雑阿倍野支部　後藤梅志

老夫婦互い違いに痛むとこ　番乗川柳社　金泉万楽

若夫婦仲よく飯の焦げを別け　川雑淀川支部　西森花村

今日の子の言葉に夫婦寝そびれる　ふあうすと川柳社　房川素生

今に尚夫唱婦随で子を育て　ふあうすと川柳社　葵徳三

夫婦だから飽きもせず喧嘩をし　川雑本社　西川晃

子が出来て別れる話もう言わず　川雑弟化川柳会　深見雅堂

銀婚ともなれば喧嘩も派手にせず　川雑本社　吉田圭井堂

夫婦とはいうがバレーの弟子師匠　川雑本社　芝原悠介

老夫婦妻をほめたりくさしたり　川雑本社　吉川一好

同権論オイハイの味知っていず　川雑本社　山本立児

珍客に夫婦目と目で御膳立　川雑ハワイ支部　堤絃月

金婚へ孫や曾孫がレイをかけ　川雑ハワイ支部　蓮池風草

残暑御見舞

大阪逓信病院
烏ケ辻川柳会

会長　尾崎方正　幹事　橋本幸男
市場没食子　西辻竹青
水谷竹荘　桝本蕗児
仲谷ハナ子　木村喜男
幹事　小沢史葉　小野木凡平
若林草右　生越正徳
森下愛論　真野康彦
池戸桃村　乾静夫
足立春雄　客員　北川春巣

固く固く信じて夫の刑期まつ
川雑南海川柳会　高崎雄声

表札も消えたまんまで老夫婦
川雑大聖寺支部　山田金仏

老夫婦バスの車掌に押し込まれ
川雑岡山支部　藤原秋月

傘持ってきたので夫婦だとわかり
川雑篠山支部　遠山一雨

発きって夫は妻の手に戻り
川雑下関支部　岡藤四郎

夫婦して歩ける年の指を折り
川雑岡山支部　浜田久米雄

酒好きを承知で添うて二十年
川雑広島支部　三上十進

たくまない夫婦の愛が子を躾
川雑大聖寺支部　野村味平

義理欠いた事で夫婦がとぼけ合い
川雑大聖寺支部　那谷光郎

臨終の妻にすまない事ばかり
川雑大聖寺支部　梅田久雄

夫婦喧嘩のもとは隣の洗濯機
川雑大聖寺支部　中松恒雄

児をあやす夫婦の顔がおどけて居
川雑宇部支部　津秋靖博

老夫婦ジルバも少しだけ歌え
川雑米子支部　田中蛙眠子

老夫婦だけ知る明治の有難さ
川雑米子支部　湯原一机

接待の社長夫婦に恐れ入り
川雑小松支部　伊藤茶仏

一応はしきたりを聞く若夫婦
川雑小松支部　道券茶の香

姑の自慢二人で出してやり
川雑小松支部　村井城南

笑い声ばかり聞える新夫婦
川雑岡山支部　光好陽子

老夫婦枯木のように支え合い
川雑弓削支部　直原七面山

臨終の叱り続けた妻へ哭き
川雑篠山支部　小西無鬼

長生きをしよう夫婦のあい言葉
川雑篠山支部　前川越山

二十年添えて文字まで似てしまい
川雑篠山支部　小西富士子

日曜の夫婦隣りの子を借りて
川雑篠山支部　前川左文字

夫婦間今日は他人のようにいる
川雑綱館支部　大西力也

子を貰う話夫婦の夜が長い
川雑綱館支部　吉田一笑

妻逝って苦労の貯金うらめしく
川雑高知支部　露口博

おかげさま養子夫婦に養われ
川雑倉敷支部　水谷谷水

恋人のようにと夫婦別居説
川雑倉敷支部　岡野風の子

子をおろせおろしませんと夫婦もめ
川雑倉敷支部　轟鳳月

長距離で夫婦愛情たしかめる
川雑倉敷支部　田垣方大

晩年にようやく夫婦だけになれ
川雑倉敷支部　野田素身郎

つれ添って五年映画にも行かず
川雑鳥取支部　但住星影

親捨てた仲とも見えぬ老夫婦
川雑明和病院支部　橋高薫風子

老夫婦六神丸にまだ頼り
川雑明和病院支部　吉本よし

新婚と言えど喧嘩は派手にやり
川雑明和病院支部　山本妙女

妓を連れて夫婦気取りも旅のこと
川雑広島支部　井内ツル

つつましく夫婦になったミシン踏み
川雑下関支部　藤田蘇人

夫婦して共に築けと相談欄
川雑木次支部　福内清夢

税務署へ夫婦ピッタリ口が合い
川雑木次支部　景山綾美

老妻もはにかむ旅の夫婦風呂
川雑出雲支部　原独仙

○

特別課題「夫婦」は本社や全国及び海外の支部や川雑系の句会の川雑川柳まつり句会での作品であるが随分沢山集句があった。第一席には路郎賞が授与され、その所属の社には優勝楯をおくることになっているので年毎に作句熱が盛りあがっている。本年の路郎賞は誰の手におちるか、なかなか予測はゆるさなかった。次に選者の選評を掲げる。

短評

麻生路郎

選は出来るだけ慎重に行った。第一席から第三席までの作品に短評を加えることにした。第一席の「夫婦連れ車中は何も話さない」この句は見たままのスケッチであるが、夫婦らしさが充分にうなずけ、何も話さないところに夫婦の溶け合った情味が感じられると思う。軽い穿ち味もある。

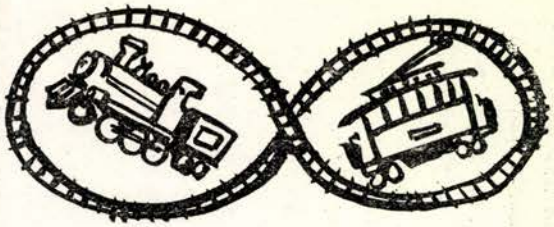
第二席の「ビヤホール妻の背中を押して入り」は「ムダな金を費わないで帰りましょう」と云う妻の姿がほおえましい。

第三席の「あっさりと折れても妻の気に入らず」の句は、勝気な妻を持つ人のなやみがそれとなしにうかがえるではないか。

× × ×

残暑御伺

交通局　北川春巣
　　富岡淡舟
川柳会　児島与呂志
　　森文夫
　　浜畑胡蝶



旅に生れた句

――句集「私達」から――

正木水客

文学が絵画や音楽と異るのは、その表現の形式が感覚的でなく、観念に直接訴える言葉の組立であると言うことである。

後者の表現即ち色彩や線や音楽の組立は、そのものの本質でありその価値に直接影響するが、文学においては眼や耳に訴える文学は単なる符号に過ぎないといえる。

しかし短詩型文学は音響的な効果を、その要素の一つとする意味において両者の中間に立つものであるとも言えようし、更に自然描写（人間をも含めて）を主体とするものは、絵画との中間をゆくものだとも言える。そうして言葉という独特な形式によって、絵画や音楽の持つ独特の情緒を一体とした、より以上の表現をすることは不可能であろうか。

私の信奉する短詩型のなかの川柳という領域において、かかる意味の条件を最もよく満たしてくれるものとして、私は「旅の句」と取り組んでみたい野望に燃えている。

× × ×

旅の句の良さは、作為を寄せつけない、真実の句であると言うことである。課題吟の「旅」の句にすぐれた旅の情緒を見出すことが少ないのも、この故であろうか。

句集「私達」の作家は旅をどんな眼でみておられるであろうか。次の分類によって、「旅に生れた句」を観賞してみよう。

① 旅の景観を句にとらえたもの

② 旅で得た情景をうたったもの

一 特定の地に限るもの

二 一般的に人の心をうつもの

③ 旅を主題としたもの

× × ×

①旅の景観を句にとらえたものこの分類の句は、私が第一に念願する種類のものであるが、実際にその景色を見聞しない人に感動を与えることはなかなか難しい。句の性格上、前書が付くことが多いのは止むを得ないことである。

青函連絡船にて
愛情をかきたつように本土の灯　湧三

上高地にて
吹くな風今宵しずかにすすきの穂　湧三

太宰府にて
おみくじを結ぶにうれし梅があり　湧三

鳥取砂丘
はるかなる砂丘は独り歩くべし　八歩

霧の阿蘇ここが峠の県ざかい　晴峯

此の島の景気を瓦屋根に見る　春巣

雪国の樹海大きく人を呑み　梅志

駅前がこんな淋しいとこもあり　圭水

月横に動くと見れば汽車曲る　水客

山の橋カメラの友を呼び戻し　杜的

高知にて
テープ切ってしばし太平洋の浪　山雨楼

以上の句から誰もが絵画的な感銘を受けるだろうが、「愛情を」「吹くな風」「はるかなる」「テープ切って」等の句から音を感じるのも私だけの独りよがりではないと思う。

②旅で得た情景をうたったもの

(一)特定の地に限るもの

この分類の句も、前書が付くことが多いが、①に較べて、いわゆる川柳味はぐっと濃くなる。

アイヌ部落を訪ねて
人慣れたアイヌの世辞をあわれめり　湧三

おむつ下げて別府航路の人となり　良子

直江津にて
降り立てば良寛さまの国の風　八歩

佐渡おけさ風に流れて来そうなり　八歩

萩市にて
萩松江人も雀もふところ手　八歩

史跡巡り
古井戸も覗いて見ねば気がすまず　尋四

白浜で値切る役をば言いつかり　雅堂

天皇北海道巡幸
空を行く天皇さんへ手をかざし　丁路

船に酔うたは瀬戸内海で笑われる　丁路

伊豆は佳しあんこが手を振り手を振って　杜的

浅津温泉にて
旅にきく鐘は湖水を越えて来る　法泉子

②の(二)一般的に人の心を打つもの

川柳味は飛躍的に大きくなる。旅の句の本領とすべき部類である

流れ星旅にしあれば詩人めき　茶仏

車窓暖かチルチルミチル顔並べ　形水

どの駅も蛙の声の終列車　瑞川

帰郷する棧橋母が揺れて見え　いさむ

旅の雨しばらく女中が話しに来　紫香

長閑さは汽車の煙を麦が吸い　麦太楼

伊達巻の後姿へ湖が暮れ　栞

お遍路の杖も花咲く方へ向き　春日

うららかさガイドの足へ鳩が寄り　京一楼

以上は感じの句といえる。

オキヤンな子楽しい旅にしてくれる　倔流洞
出張先遊廓だけは見て帰り　高志
旅心地手拭下げてどてら着て　夏六
御遺骨と一緒に上船りて拝まれる　好郎
隣席も長旅らしい胡座組み　白水
宿の名も知らず団体ついて行き　雄声
丹前の紅一点は呑まされる　初甫
一人旅向いの席も箸を取り　三司

以下はユーモアの句の部類に入る子供等が待っていまーと妻の文　好郎
○トレルマデカエルナ　部長から　好郎
小男の宿のどてらへ手もつけず　奉巣
旅馴れています駅弁次にする　良坊
鮮人にもの教えるも夜の汽車　白柳子
あゝしんどかったと温泉から帰り　圭三
駅弁は売れても軽そうに歩かず　圭水
そんな絵かきとは宿屋露知らず　栞
お休みなさいと云うて女中の顔になり　水客
旅の宿廊下の巾を蟹が這い　潮花
名所見ず宿で将棋を指し続け　万古
団体が静かになって夜行着き　ゆずる
火鉢の火入れにきたので旅を起き　水客
湯の街の改札女将顔がきき　摩天郎

以上は穿ちを主体とした句である
③旅を主題としたもの
この分類は、旅の中に身を置かないで、これを客観的にみようとしている。従って穿ちの句が多く生まれる。

剃刀の刃まで取り替え旅に出し　春雄
ポンポン船へ赤い鏡台持って住み　倔流洞
死出の旅やさしいママと子は思い　芳仙
万才の二人も外遊して来てた　凡九郎
旅という昔のことばなつかしい　博也
温泉の賀状が来てたこともあり　古方
足が出る〳〵と出張ゆきたがり　初甫
旅行地図冬には冬の旅があり　久米雄
貸浴衣今宵死ぬとは思われず　三司
道後でも連れて行ってと酌ぎながら　夕鐘
足袋少しきつく女は旅に出る　水客
送る人もなくて青森行は出る　路生

次の句は人間以外の旅を詠んだものとして面白い。

颱風の街へやっぱり渡り鳥　凡九郎
日本へ骨を埋めに来たキリン　白水

以上①②③を通じて、感じの句と云うべきもの、穿ちの句に分類されるものが、各々40%、ユーモア軽みの句に属するものが20%という数字は何かを示唆しているように思える。

× × ×

旅は人生である。
旅のみ力は未知の楽しさである
旅の楽しさは、旅立ちまでのひと時であり、
旅の楽しさは旅の思い出である
人生はまた旅である。私は生涯句の旅人でありたい。

旗上げをした『家庭劇』を観る

——文樂座へ宮島天眞氏を訪う

曾我廼家十吾の家庭劇旗上げ公演に、七十幾才のお婆ちゃんと十七、八才の娘子軍六十名が募集されたことは新聞等でご承知のことと思うが、そのなかに川柳家宮島天真氏も加入したことは地方の人達はご存知ないかも知れない。

松竹新喜劇の渋谷天外に師事して天の一字もらったという川柳人天真を、路郎先生は親しく楽屋を見舞われた。随伴する人、栞、文蝶、梅里の諸氏と私。

ズバリいうなら素人芝居のようなもので、十吾以外は芝居のできる人はいなかったが、この新人群像のなかから、天の句、地の句と抜きんでてくる人があるかと思えば好劇家また楽しからずやというところである。

道頓堀の芝居とまむし（鰻丼）は合い物で、それを大万特製の折詰も、梅里氏の心づくしとあってうれしい舌鼓をうつ。

三番目の「お婆ちゃんは太郎の嫁になる」で、天真氏は安来節を踊る老人に扮して熱演。

踊りぶり「天」で抜きたい安来節　（一三夫）

○

一、「十七才の夏」一幕

十七の夏へ十吾は遠慮する　（梅里）

最初の演し物には御大十吾は出演せず新人群に勉強させている。

二、「千万無量」四場

この道は別だとへんな気にもなり　（梅里）

恋人同士が三十七年目にまた縁結びをされるという筋。

三、「お婆ちゃんは太郎の嫁になる」七場

婆婆の風冷めたく養老院慕う　（梅里）

四、「港のない船」二場

色と欲恋は思案の帆かけ船　（梅里）

ここでは天真氏、旗艦三笠の東郷元帥のようなソブリで、甲板から双眼鏡で海を見ている船客に扮している。おそらく舞台か客席を眺めて「路郎先生見ゆ」と、よろこんだであろう。

結局天真氏は「モノ」を言わない役だったが、いつかは川柳魂に「モノ」を言わせるであろうし、センリュウ役者からセンリョウ役者になるであろうことを期待している。　（一三夫）

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「旅の句・写生吟」

六月の本社例会で句評の白柳子さんが欠席されたその代役で、川柳塔に投句した私の句を披露に及び、さてこの中でどの句が抜けるか、とやったものですが、さて蓋を開けてみますと、発表されたのは二句。

周防灘今日は海豚も出ぬ日和

千客万来神父泰然自若なり

コースは九州。あとの句は長崎大浦の天主堂。周防灘の句はぶつっけそのまゝの句です。雨の天保山を出帆して西するに従って天気は上々、晴れて、風いで、明るいものを感じながら作句しました。大浦の天主堂では別に拝観料もとるわけではないのですが、エハガキか何か売っている堂守らしい神父さんをスケッチしたのでした。〃千客万来神父の顔はなれたもの〃が原句。

俗にならず、理にも落ちず、穿ちの句にもとめるのは写生吟としてはまことに困難なことです。いきおい感じの句とか叙景の句になり勝、俳句すれすれといわれながら川柳に止まるところにおもしろ味があるともいえましょう。

本月は集った句を別に短評してみましょう。

○自然氏の、

ちんばでも良くぞ此処まで登りつめ

厳父御逝去の前書、年誌上、敬弔申上げます。七十九才でなくなられた父の人生への同情と敬意がよく出ています。弔吟としては逸。

父の訃とそぐわぬ「ちどり」の花見客

「ちどり」というのは前書による列車名です。

○登氏の、

三大祭その二つまで京大阪

思いつきで作り上げたといっては失礼ですが、日本文化に於ける関西の地位をいおうとする意図は壮ですが、むつかしい企てです。むしろ関西の祭情緒を詠まれた方を頂きます。

お祭の料理隣りも鱧を買い

○どんたく氏の、

温泉は食前食後湯につかり

御薬の効能書のようです。

かき捨てた恥をカメラにとらえられ

どんな恥か現像が出来たら見せていただきたくなる。

○豊年氏の平凡ながら一応成功した写生に

行く先は犬にまかせてする散歩

艶談義宿の女中も坐り込み

艶談義とするか猥談とするか一寸私も思案してみました。

畳敷く間を待たされて水跡見

の「水跡見」は「水見舞」でしょうね。

○実男氏。今月の句での佳品

団体の旅で方言気にもせず

群集心理、旅先の方言とも団体のお国言葉ともとれますが、自然なのは団体のお国言葉。

○錦花氏。生憎の夜行でしたので

夢の間にすぎて小さき厳島

「小さき」は正にぽつんぽつんの対岸の灯。

○すゞ女氏。梅雨の水だまりを「梅雨だまり」として

梅雨だまりはらはらさせて白い杖

梅雨だまり色のない月ぷよと居た

「月とぷよ」の句には新感覚派的な匂がします。前の句の「白い杖」は盲人なんでしょう。よくやる省略ですが、

〃ハンドルが欠伸をしたでドキッとし〃恵二朗。のこの「ハンドル」を「ハンドル」のままにしておくか「運転手」とするかは研究の余地があります。この省略はよ程誰でもわかるものでないと句意を不明確にします。

○阿茶氏。旅にはあり勝ちなものを扱って

旅の宿父の二号とまちがわれ

古稀句会の席上、私が今年七十六になる伯母とならんでいたら「古方さんの奥さんですか」には「まあ可哀そうに」と伯母にいわれただけですみましたが、

雨の白浜湯につかり湯につかり

さきの〃温泉は食前食後湯につかり〃よりははるかに詩的に表現されています。

○静観堂氏。大阪の北郊、阪急電車に十三駅があります。

十三をはずれても蛙まだ鳴かず

十三がどのくらい知られているかがこの句の条件になります。

お手軽の御休憩猫に覗かれる

犬じゃいけません。猫ならばこそ覗くも生きて来ます。

○一鶴氏、斗病の床上旅を思いながら、

ツボ焼の膳で二見の初日の出

人間やっぱり喰い気第一。その元気で早く病気を蹴っ飛ばして下さい。

○隆夫氏の、

お土産の団扇煽いで選って買い

川柳はやはり人生詩。人間詩。団扇をわざわざ買うのも旅のこと

麻生葭乃著・米田三男之介装幀

葭乃句集 福壽草

定価二百五十円 送費 三十円 菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

振替口座大阪七五〇五〇番 電話住吉(6)二六〇八一

選って買うのもまた旅のこと。

○周甫氏。

帰えりには三朝小唄に声合わせ

バスの中は一国一城。バスガールを先生に音痴も変る三朝小唄。

○湖鳥氏。

ボロボロになってお守りらしうなり

グッド・オールドと申します。あらたかな御利益への保証と感謝

○銀子氏。女流作家らしいセンスでセンチで

花言葉信じて便りへ花をそえ

○恵二朗氏。瀬戸内海を見渡す鷲羽山から

島ポッンポッンと平家の血が流れ

「ポッンポッン」は正に的確な表現。血とも見える夕陽。絞りも露出も狂いがありません。

○八九寸氏。生のままらしい調子で

木曾川鉄橋車窓に波模様

たくまずについたテニオハの「に」が堅い鉄と柔い波との自然のつながりになっています。理屈は理屈屋にまかせて素直に味いましょう。

当地にも銀座あるなど話し好き

熱海銀座、別府銀座、豊中にも銀座があります。下五の「話し好き」が光って旅のつれづれの様子をよく出しています。

○

研究題「実」

〆切 九月十五日

発表 十一月号

投句先 豊中市本町三丁目 二〇一 戸田古方

ハワイ・タイムズ紙上を飾る

★川柳と婦人

——婦人友の会作品

いったいに短歌や俳句には女流作家の作品に優れたもの多いけれど、川柳となるとどうもあまり戴けないものがよくあるようで、これは恐らく川柳の見方のフォウカスが外れているからだと思う。それは何も女流作品に限ったわけではなく一般的な傾向のようである

現代の新川柳は昔の古い低級な古川柳とは全然趣きを異にするのである。昔の古川柳は皮肉と諷刺、それに下卑た言葉などを入れ、人間の裏面や弱点を捕えて皮肉ったり、卑わいなことを表現して得意がったり、軽い悪口でも言う寸評詩でもあるかの如き句が多いのであった。

然るに現代の新しい時代に於ても、昔の古川柳そのままのものが川柳だと思ってる人達が随分多いために川柳といえば、とかく一般的に軽視されがちなる故、川柳愛好家の一人として私は常に遺憾に感ずるものであります。

尤もこれは川柳作家自身にもトガがないとは言えないので、昔の古川柳的作家の存在のためもあると思うのである。

ところで、ここに「川柳と婦人」という表題を出しましたのは日本の女流川柳家の作品をご紹介申上げたいからです。

大阪の川柳の大家、麻生路郎先生主宰の「川柳雑誌」五月号の中の「金泥集」という一欄に女流川柳作家の作品が掲載されている。流石に女流川柳家として有名なる麻生葭乃夫人のご指導だけあって何れも優秀作品が多く如何にも川柳らしい名調子で表現されている

その川柳課題は「水引」というオッな題で、贈物の包装に用いる美しい紅白の紐のことである。

川柳課題「水引」

水引をむすぶ売り娘の手の白く　小石

評、デパートの麗人？

嫁入をさす気水引そっとぬき　阿茶

評、贈物に掛けてある水引を二度勧めさせる。

サービスに水引ちゃんとかけてくれ　スミ子

水引とリボンに分けたプレゼント　知恵美

豪勢な水引だけの記念品　〆女

匿名の主を水引だけが知り　明美

水引も三軒つとめ腰が折れ　風の子

プレゼント水引かける仲でなく　葭乃

軸吟は葭乃先生の作品ですが、やっぱりいいなあと思いました。

並木東田楼

金泥集

麻生葭乃選

「弟子」

相弟子が名人会へ出るさわぎ　阿茶

愛弟子へきつい言葉も時にかけ　同

兄弟子と師匠の仲を知ってやめ　千代子

弟子みんな帰り師匠のアッパッパ　同

親しさに礼儀ちよっぴり缺いた弟子　知恵美

ホームシックの弟子を泣かせる夜の雨　同

兄弟子に分けよと故郷の味届き　俊江

兄弟子になってぼやぼやしておれず　同

愛弟子を叱って師匠も気がふさぎ　清子

師のよわい気にする弟子の方が老け　同

内弟子のよろこび母へ書きおくり　奈良子

姉弟子の糸わずらわせ喉自慢　同

陽が西に落ちても弟子に残る汗　きさ子

弟子一人師匠の恋を知っている　同

弟子の目に世間は先生知らんすぎ　千永

弟子として見ても師匠のあざやかさ　同

男弟子師匠の仲をうたがわれ　花代子

内弟子は掃除の方がうまくなり　小石

特徴のある弟子だけが目にとまり　徳子

一日の違いで兄弟子面をされ　花奈女

お師匠の録音弟子のむせび泣き　美舟

孫弟子は海のむこうで弟子をとり　沙智子

たのもしい弟子の便りにこりが取れ　たつよ

年七十漸く弟子へ仲間入り　周甫

親方のげんこつ受けたのも忘れ　逸名

師と仰ぐだけでも弟子の誇りなり　悦子

弟子と云う資格へお金もたんと要り　美喜

弟子入りをしてから個性まげられる　スミ子

お師匠の器量へ男弟子が増え　陽子

親馬鹿は弟子入りしたを自慢にし　史子

鈍感な弟子へ気長な舞扇　とよ

相弟子の悩みも聞いてやる夜更　都詩子

弟子入りへ昔の弟子の一くさり　初穂

すみっこの記事でも嬉しいお弟子さん　綾女

孫弟子に近代感覚教えられ　銀子

思い出の一夜へ弟子の謝恩会　美保

出世した弟子を自慢にする師匠　白美

教え子が上官蔭でいたわられ　明美

イヤリングはずして弟子というしぐさ　花鶴美

延ばしとく掛も内弟子知っている　葭乃

内弟子の淋しさ糸へからむ虫　同

全国の名物と川柳行脚（一）

水谷竹荘

旅好きの私は毎年、三四回全国各地へ旅行します。そして行った処の名物を味うのを、何よりの楽しみとしています。

また全国各地の柳人や未知の川柳家にお逢いして、柳談に花を咲かせ、その土地土地で聞いた珍らしい話や、名物の味わい方を、北は北海道から南は九州まで連載してみたいと思っています。

私達の恩師路郎先生も、よく旅に出られるし旅の名句が沢山あります。又先生の句集が「旅人」とつけられているのも嬉しいと思っています。古稀祝賀増大号を記念して川柳行脚へ旅立つ事に致します。柳人各位の参考になれば筆者の幸とするところです。

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと　路郎

さて、何処から先へ行こうかと考えたが、何よりも無事に全国が廻れる様、祈念がてらお寺参りから始めよう。

永平寺の精進料理

精進料理食道楽の果ての味　幽玉

精進料理仏も蛸がほしかろう　潮花

荳蔻の刺身というのに恐れ入り　多久志

曹洞宗の大本山永平寺の修行はきびしい。沢庵をたべる音や煎餅をたべるときの音は厳禁されている。そして宿坊の大広間で雲水の給仕でここの精進料理を心ゆくまで賞味するのは、都会で周囲に気がねしながら、たべるのとは比較にならないと思う。

ここの精進料理の材料は、椎茸、豆腐、茸類、大根、山芋、蓮人参、ごま、こんにゃく、これを按配してつくる。すべて雲水が水を汲み、米をとぎ、ごま油でのいため料理をする。女気の全くない料理も、捨てがたい味があり、出される容器は、すべて漆器のぬりもので精進料理には、非常にうつりがよく雅致があり、風流なのはいかにも永平寺らしいと思います

富山市の鱒ずし

すしだけであんなにしゃべる妻の客　路郎

富山市の西を流れる神通川では鱒や鮎がとれる。これを利用して売っているのが富山の名物となっている。

享保のころ藩士吉村新八が、鱒や、鮎のすしを造り、藩主に献じて、ひどく喜こばれたということに始って、江戸時代から今日に至るまで、製法も容器も変っていない。

鱒すしは、鱒を三枚におろし、二分厚みほどにそぎ切りにし塩をして約四十分ののち、水洗し、生酢に五分ほどつける。折に青笹をしきつめ、その上に酢で合わせたご飯をのせ、さらに鱒の切身をならべる。一時間から二時間ほど石の重しをのせておけば、程よいすしが出来上る。

なれずしだから持ちはよい、容器は風流めいた曲物でその中に青笹をしき、二重になっている。笹の青と飯の白と鱒の赤味がかった色がよく調和していかにもみやげ物としても、眼にもたのしいし、飯は越中米を使っているから、とてもうまいと思う、富山駅のホームでも売っています。

信州そば

信濃では月と仏とおらがそば　一茶

しなのには路郎門下の大先輩、民郎氏が信州柳壇に重きをなし、柳誌「しなの」を発行している。私も信濃路の旅では、必ず民郎氏を訪問して柳談をしては、名物のそばの御馳走に預る。信州そばといっても、更科そば、戸隠そば、川上そばなど、いろいろの名がある。

この地では、普通そば粉七、小麦粉三の割合でまぜ、手で打ってつくる。風味がよくひなびた手打そばは、善光寺参詣の旅人の忘れがたい思い出の味とまでいわれています

旅館
田毎荘
心斉橋大丸
北ノ辻東入ル
電話 (27) 八八六〇 三二一九

明石鯛の濱焼

鯛一疋で人間の騒ぐこと　路郎

明石鯛の名は高い。太平洋の荒浪をのりきって、紀淡海峡、鳴門海峡を通り瀬戸内海へ産卵と戯いに入って来る鯛は、明石付近まで来ると内海小魚の美食と休養とでふとってくる。明石付近までくると、明石鯛と呼ばれ、鳴戸海峡付近では鳴戸鯛といい、同じ鯛が二つの名前で人間たちに喜こばれるが、鯛にとって見れば有難くない事だろう。

浜焼は、忠臣蔵で名高い播州赤穂が産地。ここは昔から塩の名産地として名高いが浜焼の歴史も古い。今は塩の製法がすっかり変ったとはいえ、浜焼の味はかわらない。

塩のカマドに生鯛をいれて蒸焼にし、葦のこもでつつんでみやげ物や贈物にする。塩が鯛の身にしっとりとしみこみ、身がしまって酒によく、飯によく、また茶漬にもよろしい。焼いてから四五日目がもっともうまいたべ頃である。

×

ページの旅はつづく……

将棋の升田を語る

後藤梅志

私は升田が好きである

将棋の升田と云えば、いまは誰知らぬものもあるまい。将棋の三大タイトル王将、九段、名人位を本年に這入って握った男である。私はその升田幸三が好きである。というのは彼れに学ぶところが実に多いからであって、単に彼れは将棋が強いだけでなく、その人間味に富んだ風格や言動に、啓発されるところのものがとても多い。升田のことは、新聞や雑誌で、最近報道され尽した感があるから、よくご承知の人もあろうし、重複をさけてここには言わぬことにするが、彼れほど、ファンの多い棋士はない。今度は、升田もファンに勝たして貰ったと、ハッキリ言って居るが、実は当日（名人戦を終えた）の彼れの言は、嬉しさの余りのお世辞じゃないかと思っていた。ところが私は、この八月三日朝日新聞社で行われた、彼れの名人位就位式に行って、彼れのファンなるものと同席して、彼れのファンが実に純真であり、心から升田の名人就位を喜んで居る風を見て、また升田が心からファンに礼を云って目をしばたたいているさまを見て、これある哉と卓を打ちたい気になった次第である。以下その時の有様を詳述して見よう。川柳をつくる上にもきっとプラスになると思うから。

升田名人就位披露会

就位式は八月三日土曜日の午後二時から、定刻には五百人程はいる朝日新聞社講堂が一杯になった。ファンの層は、世代四十代五十代六十代、どちらかといえば老年組が多い。中に十四五才の子供の群れがあったのは異様に見えて写真班がパチ／＼撮っていた。当日は朝日新聞学芸部長の司会で、祝辞に次いで将棋連盟会長加藤治郎氏の挨拶。友人として小説家の藤沢桓夫氏の講演（人間升田を語る）それに続き升田新名人のあいさつ。これが終ってから余興として、在阪高段棋士の紅白戦（六棋士によるリレー戦）がある筈である。これは升田新名人の講評が呼物であった。あまりくわしく書くと、朝日の提灯持をしているようで気が引けるが、みなこれに関連してゆくので煩を厭わず書く。在阪棋士というのは、紅組。大野源一八段・高島一岐代八段・本間方彗七段・の老巧組に対して白組は若手棋士中の俊英、灘蓮照八段・熊谷達人七段・加藤一二三七段でこの加藤一二三七段は高校二年生で、十七才眉目秀麗の好男子、次期名人の第一候補者である。

遂にこの紅白戦は、百十一手をもって白組若手棋士の勝ちとなったのだが、若手棋士は終始着手を誤まらなかった。

藤沢桓夫の「人間升田を語る」

私はこの藤沢桓夫という人はあまり好きでなかった。というのは彼れの書く小説は、どこか菊池寛に似てトリックがあり少女向きで人を小馬鹿にしたような感じがチラついて居ったのだが、私はスッカリその日彼れを見直したのである。彼れが升田を語るその目である。優しく升田を見遣るその目は、肉身でもこうはいくまいと思った。控え椅子に腰を下ろして居ても、隣りの椅子の、升田と話す様子、それは愛人と話す如く、人の見る目も憚からず、如何にもうれしそうだ。壇上の弁士。それは升田もくるめてだが実に話がうまい。最上の言葉は使わなくとも、その実、心から升田を称たえている。藤沢は、その一言一動に微笑を合せている。

彼れは壇上でこういうことを云った。

「升田が戦後復員してすぐ来たのは僕のところだったが、玄関で、まず女中が闇屋と間違えてしまった。取次がんので自分で行って見ると、姿形は変れ升田だと分ったので、すぐ居間へ通したが、余り相ごうが変っているので驚ろいてしまった。しらみごと一緒に来たらしいのである。漸く落付いてから将棋は指せるかときくと、指せるらしいというのでやって見ると意外に棋力がしっかりしているので驚ろいた」という。升田はその後、週刊誌で語っているが、第一回の出征の時はよく陣中で棋譜を手にしたり、研究したりしたが、棋力はちっとも上らなかった。第二回目の応召で、戦局が悪くなってからは、研究どころか駒を手にするひまもなく、転戦から転戦と追いまくられて居たが、将棋は強くなって居て、復員して間もなく木村名人を三番棒に負かしたと云っている。これなぞは一寸分らない話だが、そうしたものであろう。藤沢氏はさきに升田が大山に負けたのは「弟弟子」という頭がぬけきらず

「升田という男はそんな場合闘志が湧いて来ないので負けたのだ」として譲らない。「今度名人になってもちっとも勝ったような気がしない」と升田はいまでも云っているが、それは升田の将棋と人間に深味が出て来た証拠で、彼れは天野宗歩はおろか、歴代名人棋士中の棋士で、最高位の棋力をもっている」と、太鼓判を押したものである。あとから升田も

「天野宗歩位の実力は今の初段、二段級の若い人達が既にもっている筈だ」と云ったから、これは嘘言ではないかも知れない。何にしてもファンというものは意外に目が肥えて居て、今度の名人戦なぞも、玄人筋は、升田大山の力を伯仲と見ていたが、素人は升田の勝ちを疑わなかった。仲々馬鹿に出来ないのである。

藤沢氏の話しは、約卅分ほどであったが、最後に

「升田の学歴は小学校だけで、これは総べての棋士がそうであるが彼れ升田は現代一流の人達、例えば画家の梅原龍三郎、作家の吉川英治をはじめ政治家、実業家、当代のえら方の誰れにも社会常識は劣って居ない。むしろ傍らで聴いて居ると、升田の言葉に教えられるところが多い」と言って居る。

また

「升田自身は、僕は話しが下手だと云っているが、実はこの位話の

体力をつくる
強力…綜合ビタミン剤
強力パンビタン
錠（30錠・100錠）　ほかに　ミネラル入M
大阪市道修町　武田薬品
ウロコ印
武田薬品

うまい男は居ない。相手によってどんな話でも出来る男である」と相ごうを崩して壇を降りた。聴衆のファンは大喜びであった。代って升田新名人が登壇した。場内は、拍手に次ぐ拍手、真に割れ返るような拍手が続く。

升田のあいさつ

升田はにこっともしないでこう云った。

「私は対局以来引っぱり廻されて休むことも出来なくて疲れはてて居たが、朝日新聞社のこの講堂でファンの皆様に一言お礼を述べたくてやって来ました。皆様有難うございました。ファンの皆様にこうして顔を上げて挨拶が出来るのも、全く皆様のお陰でそれは私が一番よく知って居ります。実は私は最後の駒をおくまでは、勝ったことを意識して居なかった。今度は終始ファンの声を意識して居て幸に勝つことを得ました。現今の八段A級棋士の実力は、殆ど甲乙がないまでに最高の棋力に達して居り、これをやぶることは実に困難で、病身でしかもこれまで失敗を重ねて身心ともに疲労し、対局中も頭がぼうとなるようなことで神仏の加護というより、負けてはファンの人達に済まんという一念で頑張りました。女房や子供のことも勿論胸奥を去来しましたが、寝ても醒ても、ファンの声が耳について、終始それに鞭撻されました。ほかのことは何を饒舌らんでもいい。これだけ云えば！思って来ました」と言う。

壇上壇下、嵐のような拍手である。升田という男は無駄なことは一つもしゃべらない男であって、次ぎに、

「名人というものは最高位のものであるからひょこひょこ負けたりするものは名人でもなんでもない。幸に今年は勝ったが来年は負ける。そんな名人は無い筈だから私は頑張るつもり。かって私は木村名人に対し

『名人なんてゴミのようなものだ』とか、云ったことがあって、それを一般から誤解されているから一応弁明する。これまでの名人は負けないように指して名人になって居た。それは名人位の冒とくでなくて何であろう。千日手をさしたり相手の過失に乗じて勝ちを占める。そうした名人をゴミだと言ったので、名人位そのものを貶したのではない。自分はこれまで升田新手と云われる新手を、百四十何手か指して来たが、これは、玄人の手を真似したものは一つもない。むしろ素人の指す手の中からヒントを得て来たものが多い。

まだまだ新手と云うか、独創の棋力を養うつもりだが、負けるのはそのために負けるので、これは仕方がない。最後の最後まで修業なのだ。

よく素人や、新聞社の人から『君は何手位先を読んでるのか』と聞かれ困るのだが、どんな場合でも、廿手や廿二三手は読むと云ってもよいが、実は既成手段というか読んでも分かってる手があって、それは入れて居ないから、これを入れれば百手以上は読んで居ることになる。しかしそれも中盤までで、それから先は定石というものがないから、全くカンで行く場合が多い。しかしこの感というものは素人の人には想像外のもので、相手がカンで来ると思えば、こっちもカンで行く。虚々実々で、押せば引く、引けば押すという呼吸が生じる。

自分は将棋は芸術だと信じて居るが、そうでないという人もある。この話しは、永くなるから止めるが、まだまだ将棋は進歩することを、断言する。恐いのはここに居る（と下を指し）加藤一二三君の様な若い人で、負けるとすればここいらでしょう」と、笑って壇を降りる。この間ファン一同は呼吸をつめて聞入り、水を打った如くであった。藤沢氏は、既にこんな話は升田との間に、たびたびして居るのであろう、ニコニコと聞いて居て、壇を降りた升田新名人に手をさし延べる。真にほほ笑ましい状景であった。

紅白リレー戦

小憩後つづいて紅白戦にうつる。将棋のリレー戦というのは、指し方は色々あるが、ここでは、まん中に盤をおき、一名十手づつ双方で廿手を運ぶ。全部の棋士が二回づつやれば、百二十手進む訳である。時間は一手一分以内に指す。まず紅軍から本間七段。白軍からは、加藤一二三七段が現われる。他の棋士は盤の見える程度の後方に控える。ファンから見える非出席されるようおすすめする。

▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）で八月十八日午後三時から堺市浜寺諏訪森、中島生々庵邸で納涼句会を開催▼大阪逓信病院島ヶ辻川柳会は八月三十一日猛暑を避けて大和室生寺一泊で、尾崎方正医博の帰朝歓迎句会を開催▼南海電鉄川柳会は八月廿六日午後六時から粉浜の親和寮で開催、以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部句会は九月十一日午後六時から東淀川区三津屋北通四の二九武部香林居で開催兼題「二階借」「アンテナ」「笑顔」▼川雑備前支部句会は八月十七日娯句楽居で開催▼川雑名古屋支部創立句会は七月二十一日に越鳥居で開催された▼川雑倉敷支部句会は八月十一日慈愛幼稚園で開催された▼川雑下関支部納涼句会は八月三日鉄道会館で開催された▼静岡川柳社では七月二十三日に小集をされた▼水郷川柳社（大洲市）では八月四日、県下夏の川柳大会を催された▼剣花坊忌川柳会は九月八日正午から白河市円明寺かどや兼題「柳友」「恩師」「思い出」福島県白河市五箇局区内借宿、東北川柳会主催▼川雑木次支部（島根県）では七月二十八日夜、正本水客氏の歓迎句会を開催▼体温川柳会（貝塚市）では七月十四日午後三時から千石荘物故者の霊前句会を開催された▼広島平和祭協賛川柳大会（広島市）が八月四日山陽記念館で開催され盛会だった▼全県下川柳大会（秋田県）は九月一日午前九時から秋田市中央公民館で開催主催は秋田市金座街二、川柳蛇吟社▼山王連合赤十字奉仕団文化部（大阪市）に十悟、堰子両氏の肝いりで川柳会が生まれ山王連合事務所で毎土曜の夕に催されることになりその第一回が八月十七日に開かれた▼渋川海水浴場川柳大会（岡山県）は八月十一日に渋川公民館で開催され盛会▼川雑広島支部句会は八月廿五日午前十時から広島市南蟹屋町鉄道宿舎国弘半休居で開催。

消息

▼前田伍健氏（松山市）は日本刀工で唯一人の人間文化財高橋貞次氏（松山在住）の保護委員に県から指名されたとのこと▼尾崎方正医博（大阪逓信病院耳鼻科医長）は第六回国際耳鼻咽喉科学会に出席のため五月三日渡米、学会終了後米国内並に英、仏、スペイン、ベルギー、オランダ、デンマーク独逸、瑞西、伊国等の諸大学並びに研究所、特に臨床方面を視察され八月七日朝七時二十八分大阪駅着で帰国、大阪逓信病院長、麻生路郎川雑主幹等多数の出迎えをうけられた▼津田麦太楼氏は七月末に日赤支部の事務局長を勇退された。自宅は岡山市中原七二九▼大野風柳氏（新津市）は九月八日に開催される北国川柳大会へ出席し、同会へ出席の関西柳人と交歓、大会終了後、山中病院に療養

柳界展望

句会

演壇側壁面には、大盤将棋が動いていって、一手一手がファンからよく見える仕掛けである。面白いことは、各棋士の棋風が、棋士の人物とぴったりであることだ。

廿手経過。次は高島八段に、熊谷七段。ファンの目は全く伯仲に進む手順の検討に、余念がない。升田名人の解説は、素人に分り易いように、序盤駒組の常識を説く。

突如、加藤連盟会長が名人に「何手位で終りそうですか」と訊く。これは、実はこのリレー戦はファンに対してどちらが、何手で勝つかを、懸賞付で問うている。もう締切（投票）であるから問うても差支えがない訳。升田名人

「百二十手位かな」と答える。第二の組が終って紅、大野八段対白、灘八段にうつる頃は急戦模様となり、再び加藤会長は、名人に「少し早くなりそうだが」と訊くが、名人は格別動じない。この組で局面は少し荒れ模様となって来て、中盤から一挙に終盤の攻合いに這入りそう。ファンの間にささやきが洩れる。すでに白軍が優勢を占めたかに見えたが、百戦錬磨の紅軍は、敵陣に早やくも殺倒する気配。再び、バトンは本間、加藤両七段にうつり、白兵戦となる。まだ白軍は、敵陣に一歩も占めて居ないが、紅軍の指切りをねらってる様子。この辺へ来ると戦局に影響するので、解説は全くない。既に八十手進んで、高島八段対、熊谷七段となる。熊谷七段が立つ時「こんな将棋を負けたら怒られるぞ」と小いさい声で云ったそうである。しかし局面は、ファンには熊谷七段の方が苦しそうに見える。熊谷七段は、遂に先手が廻り八十五手目に2二金と、敵陣の一方に打込んだ。どちらか一手勝と見える。流石高段棋士だけあって一手毎に勝敗感がちがって来る。遂に百手終了。大野八段対灘八段となる。進行中、升田名人が立上った。

「この将棋はもう二手位で終ります」とファンの方へ言う。ファンには、まだそう簡単に詰むとは思えないので、みなキョトンとする。しかし、果して大野八段が、もう二手駒を動かして、駒を投じた。

升田の講評

升田は講評でこんなことを言った。

「一分将棋というものは、突拍子もない結果に終るものだが、この将棋は最初から紅組のチームワークがとれて居なかったようだ。目下順位戦を指して居る最中だから、ウッカリ手を見られてもつまらんと思って、古狸だから、間を外して指して居たかも知れないが、どうも見ていると、交代間隙になって、みんな、拙い手を指して居たようだ。中途で拙い手を指すと、自分に荷がかかってくるから、気を入れて指すが、交代間際には、あとはどうにかやってくれるだろうと、無茶な手を指して交代して居た。そんな手が分からん様な人達ではないのだが、指す。これは棋士というものが、如何に責任観念が無いかという、いい例だ」うしろでは、大野八段が頭を抱えている。誰かが、舌を出したようだ。白組の方は、若いだけあって真面目に読んで良く戦った。と結んで講評は終った。

× ×

名人就位早々、こんなことを言う名人はあるまい。私は、日本にこういう男が居るということだけで、生甲斐を感じている。

升田は、今年の元旦に、「下積みの修業が永くないと焼きが戻る」ということを云っていた。下積み、下積み、これと「修業」とを結びつけて、考えて見よう。川柳だとて、大して変ることが無いように思う。

× ×

『棋ハ力なり』

『蕭眼大局　蕭手小局』

これは、升田の色紙の文字である。

（終）

コーヒの味

モダン川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㊥ 6684

御集会には階上御利用下さい

中の柳都同人江原たつ路を慰問される由▼西尾寒氏（大阪市）は八月十日夕から、長男、長女、次女三女を伴い熊野路へ遊ばれ「末っ子が宿浴衣着る面白さ」の句を寄せられた▼佐野卜占氏（八代市）は八月下旬に修学旅行千二百人を案内して廿九日は奈良泊りなので久しぶりに県庁へも顔出しをされる由、なお同氏の通信では熊本の甲斐田桜里氏はお気の毒に軒までの水害だったと、其他の柳人諸氏も被害があったことは思いますが、通信さえうまく届かぬありさまなので施すすべもないのでゆるし願いたい▼橋高薫風子氏（大阪市）は七月三十一日に明和病院を退院、曾根の公団住宅の新居に落ちつかれ大阪の宅と半々で消光されるとのこと「退院へひそかな恋も置いてくる」の名吟を寄せられた。実感句かどうか保証の限りでない▼黒川紫香氏（池田市）は八月一日から飛弾高山、乗鞍、平湯、上高地を経て信州浅間温泉へ「ふりむけば穂高がせまる河童橋」「乗鞍で冬の仕度をして歩き」の句を寄せられた▼速水真珠洞氏（福岡市）の来信に「本日雑誌拝見なかなかの賑かさであり生々庵氏葭乃女史の舞扇はきまるところがきまってはでやかでした―舞扇二ツ流れる夏踊り―とでも云いましょうか」とある▼伊藤茶仏氏（小松市）は七月末に流感で一週間ほど臨床されたと、夏のカゼは厄介である▼水谷竹荘氏（大阪市）は七月十八日熊本市の噴煙吟社を訪ね、甲斐田桜里に会い、熊本逓信病院では電々川柳会の田口一飄氏と語り、次いで大島濤明氏を訪問歓談された。それから別府方面を廻って阿蘇登山、二十日夜に帰阪された▼築山快夢起氏（ホノルル市）は毎日三時頃までオフイスの事務を執りワイキキ近くのビーチで泳いで帰られるとのこと▼浜田久米雄氏（岡山県）は十月二十六日に、鉄道生活三十年で功績章を受け表彰されるとのことお欣び申上げる。なお十月にはその記念句会を牛神会館で開催される由▼小倉へとち氏（神戸市）は目下引揚者公債交付手続きの実務指導をやって汗だくだとのこと、海外生活四十六年の氏も十年賦の公債二万八千円受領組の一人なのである▼前山五竜氏（諫早市）への郵便物（雑誌）不着らしいので再送したところ二回分とも着いたとのことで、それよりも氏の無事をおよろこび申上げる▼米沢暁明氏（大洲市）は八月十日来阪、川雑本社へ路郎主幹を訪ね歓談された▼田口一飄氏（熊本市）は七月二十六日の水害には四年前にこりて高地へ移っていたので大事にはならなかったと。鳴風、濤明さんほか当地の柳人も命には別状ないようですとあるが、交通が杜絶で被害が不明なのであろうと案じている▼小浜牧人氏（神戸市）は八月十六日、道後温泉に遊ばれ「宿の窓城下の街の灯が涼し」の句を寄せられた。

句集・句報

▼川柳句集KANREKIが七月七日に神戸市須磨区稲葉町二ノ一六、柴田浪子氏によって刊行された。なかなかいい句があるが句集と云うには小型すぎると思う▼川雑名古屋支部から句報「川雑名古屋」が八月に創刊された（ガリ版）

一路集

鍵

土井文蝶選

鍵の所在知らせて置いて頼む留守　進之助
鍵二つまだアパートは共稼ぎ　凡茶
鍵一つ浴衣にのせて家族風呂　一進
潮焼けの顔赤道の鍵を受け　同
勤続二十年金庫の鍵も預けられ　蜻蛉
まじないだからと手で開く鍵をかけ　同
倦怠期別々に鍵持ち歩るき　よし子
大金庫鍵もかかった終業ベル　笑太
鍵数え宿直事故のない夜明け　義夫
共稼ぎ鍵の置場も打ち合せ　錦花
鍵四五本主任の腰にぶらさがり　同
鍵かけておけばと愚痴がまだ続き　同
黄金の鍵を子供の夢が追い　どんたく
鍵だけであかぬ金庫がうらめしい　一ン十
鍵かけた途端に財布を思い出し　初甫
鍵束もしかと守衛は引継がれ　牧人
管理人酒たしなめて鍵を出し　同
倉庫破り程宿直は鍵をもち　庸佑
鍵はまだ子にまかされぬ枕もと　蓑流
頼りない鍵をたのんで風呂に行き　黙噪
夫にも見せたい日記鍵を置き　雄々
息子五十鍵のありかをまだ知らず　夜潮
鍵かけた机の秘密母が知り　陽子
赤いリボン付けてる鍵は妻が持ち　幽谷
家内中パズルの鍵に夜を更かし　一兆
井戸端の口が事件の鍵となり　寅男
刑務所の朝が始まる鍵の音　恒雄
共稼ぎ鍵の置場を今日も変え　秀三
鍵一つ持たぬ養子のよく稼ぎ　豊年
信用をされてる鍵をチャラつかせ　芳仙
借金取鍵の穴からのぞきこみ　十七
鍵束を預かる椅子でちょろまかし　味平
色紐で鍵を区別の御寮はん　仲宇呂
手鍵無用仲仕大荷をもてあまし　光郎
鍵の音未決の耳へ冷た過ぎ　恵二朗
交渉の鍵を握って馘になり　鬼美
鍵かけた中でラジオは謳ってる　八九寸
鍵の戻るまでパチンコ屋で遊び　九呂平
独房を潜れば背から鍵の音　代仕男
ドアーのキー君にあすりし夜の化粧　七面山
解決の鍵を握ったまま家出　千容
愛を得たあかし合鍵渡される　一也
鍵一つ役附と云う朝を出る　不二
顔かけた心の鍵を絵馬に掲げ　丹謡
美容院へ鍵はどこだと聞きにくる　白李
鍵かけて出る程財のありもせず　巌
頓死して金庫の鍵が見当らず　十九平
鍵かけて引張って見るノイローゼ　雄声
(五)キーボックス七号室は朝帰えり　牧人
(五)養子まだ金庫の鍵へ遠くいる　葵丘
(五)電報で鍵の置場を知らせて来　幽谷
(五)大旦那が睨らんでるよな蔵の鍵　好子
(八)相鍵の先きに戻った方が炊き　恵二朗
(地)鍵かけた様に女の無口なり　高志
(天)足首に鍵ぶらさげて湯につかり　春吉

愛人

福田妄夢選

愛人のままでいいわと酔っている　鬼美
愛人へ見合の話ふせておき　雄声
僕だけに通ずるリボンつけて来る　むじな
愛人の噂をたてて欲し素振り　八九寸
愛人が子等のつめたい瞳に出合い　愛鳩
愛人を信じて遥々海を越え　藤波
ロケットの中見せられぬ人がおり　恵二朗
無精髭もたのもし愛人なればこそ　東雲楼
愛人に酒量の方は伏せておき　高史
愛人を乗せたペタルの軽いこと　勝三
いくらでもあると愛人けなされて　辰始
これがかっての愛人かいな妻の顔　虹要
ねぼけ顔見て愛人の興がさめ　幸路
愛人が見ている泳ぎチト気取り　光郎
日記帳ここから愛人に裏切られ　同
愛人へだけはレディファーストで　千里
愛人の写真アルバムにまだ貼れず　三四郎
愛人の好くネクタイの赤くなり　味平
愛人の席を鞄で取って置き　木魚
愛人と別れた丘で子と遊び　一兆
妻の座に直す愛人若過ぎる　南牛子
愛人を別な駅から乗せて旅　湖鳥
慰藉料を考えている愛人とは知らず　舟遊
愛人が出来て妹忘れられ　静馬
愛人へ初めて使う流行語　初甫
愛人に今宵は許す紅をぬり　義夫
愛人のつもりプロマイドを壁に貼り　どんたく
愛人が遺産のことで顔を出し　隆文
大学を出て愛人の気が変り　幽谷
愛人を不良と親がきめちまい　葵丘
げんめつは愛人浪花節が好き　同
愛人の無口が母の気に入られ　白李
愛人の爪の赤さを親は責め　巌
愛人の声を知ってる交換手　淀月
愛人が案外ケチなのにあきれ　十九平
愛人のもう弟妹を連れて来ず　俊見
愛人の連れの分まで払わされ　秀三
愛人も出来ず吸がらなど探し　昌男
居候に愛人が来た日の騒ぎ　同
愛人と同じ名前のバスガール　不二
愛人と呼ばれ情婦とも呼ばれ　七面山
愛人の背丈を母に云いそびれ　蓑流
エプロンをかけて愛人見直され　牧人
愛人の価値ソロバンに乗せて見る　九呂平
(佳)愛人に介抱された酒を悔い　陽子
(佳)愛人とすまなく通るくにの駅　巌
(佳)みんなしてもう愛人にしてしまい　庸佑
(佳)愛人の今日の無口が気にかかり　恒雄
(佳)愛人に感じてほしい声を出し　一雨
(佳)親捨てるとこで愛人気が変り　蓑流
(軸)予定表K子K子とつづいてゐ

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社 納涼句会（大阪市）

八月七日　午後六時　於 光明寺

都会の離れ座敷といった感じの会場。カリブソを歌う蟬の声も、都会人には別天地へきたように楽しい。お誂えむきの夕立もあっての天然冷房の中で清水白柳子氏の句評から会が開かれる。八月号の井蛙、葉光、文秋、多久志、望峰諸氏の句から、暗合のことにふれ、暗合ノイローゼになるなと力説。又は佳句として白李、芳道、春巣、花村、清生、夜潮、ひか平、十悟、一三夫、満秋、矢寸志、村楓子、きさ子、白溪子諸氏の句を挙げられた。待望の柳話、路郎先生は古稀を機にもう一度、一から出直して句の勉強をしたいと烈々の意気を示された。最近のいわゆる大家と称される人々の駄作を嘆かれ、自分もその列に加わりはせぬかと案じ、作品を乗り越しての一からスタートしたいと、その情熱は、太陽のように燃えに燃える。八月の、不朽洞賞杯は、長期連続全出席を誇る冨岡淡舟氏がうけられた——閉会九時三十分。（F）

出席者—路郎・三司・一三夫・淡舟・水客・いさむ・潮花・博也・白柳子・白水・豆秋・文蝶・多久志・生々庵・好郎・紫香・恒明・梅里・いわを・文秋・利武・杜的・水堂・月都・淀月・季賛・六竜子・十悟・梅志・万的・玲人・静馬・花村・牧人・美恵子・飄太・葉乙女・薫風子・旭・永断・与呂志・高志・逸人・仙月・悟朗・立児・庸佑・圭井堂・千里・高史・井平・旅風・義弘・柳宏子・昌男・進之助・楽夫・宏子・葭乃・

兼題「介抱」　麻生路郎選

介抱に叱る一人も付けて置き　十悟
介抱をされる方でも飽いており　凡九郎
介抱の手も届かない旅に寝て　潮花
介抱は下戸にまかせてのみつづけ　柳宏子
介抱の妻はある日の母に似る　三司
介抱され有難がっている養子　万的
妻の座と云う介抱が行き届き　葉乙女
介抱をする気一人だけ残り　紫香
介抱に来て大阪が好きになり　淀月
バイブルを読んできかせている介抱　豆秋
介抱へ無い物ばかり所望して　文蝶
介抱の先客おかゆ炊いて居り　堰子
もうあきらめてましたと介抱うれしそう　博也
撰りにより便所の横で介抱し　幽谷
くだまいて介抱さしてつけといて　千里
女房はいいなと思う水枕　梅甚
逆らわぬその介抱も気に入らず　圭井堂
介抱をすると妻の手つめた過ぎ　与呂志
介抱の父もかけてる吸入器　楽天
筋書のとおり介抱寄って来る　昌男
氷割りながら遺産のことおもい　水堂
つけとどけ効いて介抱ゆきとどき　梅里
介抱は矢張り母のかゆの味　立児
くすりをむりにのませて子にられ　智治
奥さんに叱られそうな介抱し　梅志
よう飲まんのへ介抱を頼んどき　一三夫
介抱が今日は祈とうの座に座る　川柳堂
介抱をしていたことにして泊り　牧人
介抱をしながら書道習うて来た　杜的
介抱へ髪を染めてることも云い　水客
うち介抱したげる女給としてでない　美恵子
真剣な介抱親を叱りつけ　白柳子
寝台の下から介抱声を出し　十悟
二号邸で倒れ介抱ゆきとどき　水客
介抱をされてて憎いことを云う　杜的
死んじゃイヤイヤよと介抱必死なり　淡舟
介抱をしたるしたるが先に酔い　好郎
介抱と見せて懐中ぶったくり　晃
無器用な夫の介抱に気が疲れ　静馬
介抱をドキッとさせることを云い　博也
チップには介抱代も入って居　庸佑
介抱にほかの女が居た匂い　堰子
年甲斐もなく介抱に甘えてい　杜的
介抱に又札を云うなさぬ仲　花村
介抱もせずに遺産がころげ込み　一ン十
足腰をさする介抱はせなんだが　阿茶
粥を煮る妻も疲れて細そうなり　十七
介抱へ元看護婦が役に立ち　薫風子
お前も死ねに介抱ちとあわて　文蝶
お別れの言葉と介抱気がつかず　淡舟

兼題「水着」　中島生々庵選

借物の水着で妻も若返り　晃
水着の跡だけがわたしの色なのよ　十悟
ビーチパラソルもう少女じゃない水着　六龍子
二三人産んだ水着と思われず　多久志
浮袋だけを頼っている水着　進之助
雑布のように水着を持ち帰り　月都
退屈をしてる水着の座りよう　水客
見ぬ振りで見てる水着の太い股　豆秋
女の水着だんだん露出狂になり　淡舟
お粗末な水着の方がよく泳ぎ　阿茶
水着のまま心中するとは思われず　水客
新型の水着がへそを出せと云う　昌男
幻滅は水着に覗く灸のあと　梅里
シミーズでおばはん派手に泳ぎけり　晃
夏痩の水着姿をうらやまれ　牧人
マネキンの水着楽屋で汗をふき　花村
色褪せた水着が挑む新記録　一三夫
子に譲る水着の型を笑われる　玲人
海水着子はおっぱいをよくせがみ　楽天
黒一色の水着で沖にいる孤独　万的
水着でも玄人くさいとこが見え　阿茶
戸を閉めて美容体操する水着　玲人
押し込めば水着は誰にでも着られ　一ン十
お臍までつかっただけの海水着　いさむ
海へきても母は水着の肩がこり　水客
恋人の水着意外にやせている　玲人
子がそろそろ泳げて妻にもいる水着　万的

兼題「扇風機」　正本水客選

扇風機かけつぱなして店はひま　千里
借貸の話と別な扇風機　文蝶
扇風機横を向いたで煙草の火　文秋
女客扇風機へも世辞を云い　文蝶
扇風機まだ買いたての音でまい　与呂志
扇風機明治生れに嫌がられ　井平
扇風機やっと二人になれた風　恒明
挨拶は後へまわして扇風機　井平
おしぼりも出て扇風機廻り出し　多久志
扇風機仲居も襟へ風を入れ　牧人
扇風機が四つ場末の映画館　旭
扇風機の風へマッチは逆らわず　昌男
扇風機かけて留守番寝てしまい　淀月
扇風機稽古に邪魔な音が入り　梅志
密談へせわしくまわる扇風機　美舟
仲直りしてからの扇風機　杜的
ラムネだけちびちび飲んでる扇風機　潮花
黙否権刑事へまわる扇風機　三司
扇風機かければ味付のりが飛ぶ　花村
戯らにメモを飛ばした扇風機　潮花
扇風機の翼へさわって見たい指　昌男
云い負けてきて扇風機1をかけ　好郎
奥さんの浮気見ている扇風機　水堂
二号邸猫の昼寝へ扇風機　豆秋
残業へなに気兼ねない扇風機　いさむ
定刻の御帰りしずかな扇風機　十悟
大晦日餅屋に扇風機がうなり　文秋
扇風機畳に下し飯にする　一ン十
扇風機ビールの泡をかるく撫で　水堂

仏壇へ尻向けている扇風機　豆秋
夕立の音扇風機止めてきき　飄太
扇風機の前でお土産開げられ　白水
西瓜切ろ背へ扇風機向けられる　紫香
湖の風にさからう扇風機　潮花
先代のことも知ってる扇風機　美恵子
扇風機着付けの背へ位置をとり　旅風
扇風機ラッシュの顔をなでまわし　義弘
扇風機の風速などを計って見　文秋
扇風機むかしの暮し匂わせる　梅志
扇風機あっちへ向けている冒散　玲人
扇風機を止めて履歴書読んでくれ　圭井堂
客送り出して扇風機へ座り　立児
大文字ひとり舞うてる扇風機　好郎
扇風機お前も首が廻らぬか　晃
見送って帰れば扇風機だけ廻り　紫香
もう着く頃と扇風機もかけて待ち　水客

兼題「化粧品」　丸尾潮花選

化粧品薬局程に飾り立て　文蝶
小遣いの枠をはみ出す化粧品　牧人
飲めそうな色です瓶です化粧水　玲人
妹へ隠し場のない化粧品　堰子
お粗末な顔だがパリの化粧品　一三夫
広告を半分塗ってる化粧品　静馬
LSがどうのこうのと化粧品　進之助
母達者へちまの水を大事がり　水客
この顔のどこへぬる気の化粧品　凡九郎
目を離したら子供お化けのように塗り　文秋
化粧品小間物屋ほど出して塗り　幽谷
集会の仲居クリームだけにする　三司
化粧品屋は用事のない女　文蝶
AとかBとか化粧品骨が折れ　多久志
テレビラジオ皆別嬪にしたるさ　圭井堂
ジャスミンに三十処女のつく吐息　晃
美しくなる気ではずむ化粧品　博也
シワ埋める化粧品代高うつき　一三夫
化粧品マネキン程に艶が出ず　高志
化粧品塗って叩いて顔が出来　梅里
駆け落の帯に忘れぬコンパクト　六龍子
化粧品だけはけちけちせずにぬり　文秋
化粧品されども鼻は高こならず　白柳子
舶来のお化粧品にかぶれ出し　葉乙女
不細工な顔でピカソのピアスのと　飄太
男にも塗るものがある化粧品　三司
すこし何とかせいとくださる化粧品　一ン十
化粧品売場で出来た顔で来る　梅里
化粧品女の悲願塗りつづけ　旅風
口紅の感触こころ和まぬ日　水客
連れあいをうしのてからの化粧水　潮花

席題「晝休み」　若本多久志選

昼休み蚊をたたきつつよくしゃべり　智治
逢引の電話がかかる昼休み　文蝶
しゃあしゃあと昼休みにくどかれる　圭井堂
昼休み女工は故郷の話する　潮花
昼休み牛は牛連れ碁を囲み　柳宏子
スリッパでパチンコしてる昼休み　豆秋
昼休み若さはバットを振りまわし　高志
上役を派手にけなして昼休み　水堂
恋してる二人に短い昼休み　淀月
コーラスが廊下に洩れる昼休み　博也
昼休み課長に私用たのまれる　淀月
昼休み前場の株をそっときき　水客
べんちゃらが過ぎたと思う昼休み　井平
ニコヨンが弁当まくらの昼休み　立児
冷房になり昼休み席に居り　昌男
昼休み好いた同志のもう見えず　庸佑
昼休み三回裏でベルがなり　文蝶
昼休み社長の秘書を話題にし　高史
共稼ぎ昼の休みに一寸逢い　恒明
昼休み妻の用事をすましとき　進之助
屋上の空気を吸いに昼休み　梅里
昼休み使いが当るあみだくじ　一三夫
昼休み一人ぼっちは課長なり　水堂
昼休み抜いて交渉まだ続き　静馬
彼女から電話待ってる昼休み　万的
昼休み今日はすねてる女事務　昌男
昼休みひとり離れて父なし子　晃
面会は掛け頭りだった昼休み　一三夫
昼休みいつものとこと約束し　梅里
公僕がすげなく去った昼休み　高志
昼休み課長がいない扇風機　博也
昼休み女工乳房の張りを知る　美恵子
熱帯魚動かずビルの昼休み　晃
北浜を一寸覗いた昼休み　恒明
昼休み昨日の続きのろけられ　圭井堂
昼休み大工削った板で寝る　晃
昼休みよんべのヒスを思い出し　多久志

席題「姿」　後藤梅志選

ともかくもうしろ姿をほめておき　梅里
つと立った姿に芸の年期みせ　立児
晴れ姿母座って見立って見る　昌男
アロハシャツ苦労の足りぬ姿なり　水堂
後から見れば別嬪らしく見え　進之助
満ち足りた姿に見える蝿叩き　水客
姿迄そっくり伴店を継ぐ　晃
ふるさとの姿むかしのままで佳し　一三夫
後から見た姿には不足なし　庸佑
善人の姿ラジオで泣いている　博也
一目見たい姿へファンがワンサと来　旭
鐘楼が姿現わす霧が晴れ　牧人
動物園子供の姿見失い　静馬
猫背まで亡父そっくりの子に頼り　圭井堂
月給日父の姿が淋し過ぎ　杜的
どうみても金には縁のない姿　水堂
姿見へ過去を忘れる化粧する　三司
お姿を拝んで老婆泣きくずれ　梅里
憎らしい後姿へ水をまき　水客
見られない姿になって父帰る　豆秋
駅下りた父の姿がよく判り　紫香
大阪は生きる姿の貨物駅　玲人
姿には似ぬ根性を持ち合わせ　晃
子の姿一と目見に来た松屋町　一三夫
妻の目に後ろ姿の肩がおち　梅志

席題「キャンプ」　新川博也選

俄か雨河原のキャンプ宿替える　圭井堂
不眠症キャンプの月がきれいなり　昌男
強盗も出るキャンプとは書いてなし　月都
キャンプ組云い値ではまち買ってゆき　梅志
蚊取線香忘れてキャンプ蚊に喰われ　淡舟
注意報ラジオへキャンプ泡を食い　一三夫

気分変えて見る気二人で来たキャンプ　飄太
あき缶を山程積んでキャンプ去に　圭井堂
景色より隣のテント気にかかり　高史
お炊事は男にまかすキャンプの娘　潮花
ジャズマンボカリブソキャンプやかましい　淡舟
キャンプの灯てんてん月をほめ水をほめ　水客
今迄の恋の仕上げというキャンプ　進之助
また次の飯に逐われているキャンプ　好郎
当番を残してキャンプみんな留守　生々庵
原色を干してキャンプ沖暮れてゆき　薫風子
のぞかれてのぞいてキャンプ朝になり　三司
さて誰も知らない星座があるキャンプ　恒明
キャンプでも父はどっかと坐した儘　晃
何となく三対三で来たキャンプ　美恵子
灯を消したキャンプを月にのぞかれた　千里
キャンプから帰ってぐうぐうよくねむり　庸佑
煙草喫う癖ついて来たキャンプ　白水
コーラスが終ってキャンプ飯になり　薫風子
夜が更けキャンプの娘こわくなり　静馬
キャンプから恋は速度をあげて来る　昌男
キャンプから山の神秘を教えられ　梅里
罐切りを忘れキャンプは朝を待ち　文蝶
先生を囲んでキャンプ海の歌　美恵子
シネスコの様なキャンプへ陽が昇る　玲人
ポータブル隣は寝ないテントなり　三司
キャンプファイヤ十年前と同じ色　博也

（YOU清記）

麻生路郎先生

古稀祝賀川柳大会

（天地人句前月発表）

兼題「友達」　岸本水府選

悪友と紹介されてからの仲　修三
ソロバンを仕舞えば友の顔となり　三郎
鉢巻きの汚れ恥なき友と呼ぶ　与志男
いつも割勘友情はかわらない　嶺月
貸借りのある友達で気が揃い　省三
フレンドのままとは虫のよい話　一雨
友達が減って落目を意識する　紅月
旧友はよいもの曼珠沙華の土手　某人
そんざいな電話がうれし友の声　承平
旧友に会えば子供の年を聞き　風柳
分け前がすんで友達の顔になり　小松園
友だちもふと子を思う梯子酒　徳三
呼び捨てにうんと答える気の軽さ　代仕男
友情のここから先は金がいり　賤女
貯めるのを廃せと友達真顔なり　夜潮
秀才と云われほんとの友がほし　文平
友達がよかった過去をなつかしみ　季餐
友達甲斐飲むと子の事妻のこと　梅志
友達はこいつですよと犬を連れ　建朗
みんなには好かれ家ではもてぬ友　暁明
友達を頼ってみればそこも貧　嘉次
頼りないから友達のままでおり　賀峰
友達という名の他人多すぎて　古方
ほろ酔のときは友達らしくなり　白柳子
胸襟を披いて友に借りられる　太路
友達と見えぬ氏子の猿田彦　淀月
友達が手術したので酒がやみ　幽谷
友達の一人妻にもしやれをいい　逸名
旧友を祝う男の眼の涙　万的
悪口を云う友達を頼りにし　雄々
友達の友達が来る廻り椅子　武助
友として遊びライバルとして学ぶ　弘道
妻の友ばかりで夫座をはずし　花代子
手際よく茶飲友達酒をつけ　梅子
友達の仲間外れがよく儲け　茶仏
友達方より来るうるさいのが　静観堂
なつかしい旧友が待つ赴任先　言也
旧友がしみじみ嬉し貸浴衣　生々庵
台所で妻の友達よく笑い　宝山
無口にはやはり無口の友が出来　湖鳥
友達が去って自炊の火を起し　味平
友達をみんなあつめたシャンデリヤ　翠光
孝行な友達が来て母嬉し　真寿夫
日曜のボーイフレンドまた変り　牧人
友達がピースを出せば富士を出し　水車
友達が出来たか変る子の訛り　某人
中学の友に日本一が居り　春巣
ガールフレンドフレンドのままでなし　塊人
忠告をしそうな友を逃げている　万楽
貸した友借りた友ありややこい　貴山

兼題「若返り」　椙元紋太選

登山帽わしもまだまだ若いやろ　蕗児
みな本気若返り決闘いてる目　越舟
アルサロでつねられ若さ取り戻し　狂二
三味線に養老院も若返り　美柳
花嫁に付き添う妻も若返り　枝葉
新築をしてから妻の若返り　紫香
若返りフォークダンスに混り込み　百草
復讐がかなって妻も若返り　宗太郎
もうけてるらしく近頃若返り　東岸子
本当に阿呆の様に若返り　須賀太
若返りバナマが似うからかぶる　三司
母居ますためにはり切る若返り　生々庵
若返る話を女房小馬鹿にし　高史
老夫婦ロマンスカーへ若返り　喜楽
齢とったは口だけ無理に若返り　風間
子をあずけ同窓会で若返り　奈良子
門弟と飲む雰囲気に若く居る　言也
絵日記が可笑しひとりで若返る　梅志
若返る薬の筈が胃をそこね　青二
忙しゆおましてと此頃若やいで　耕民
取沙汰を尻目に婦長若返り　九呂平
お若いと言われて報いられた顔　暁明
汚職などしてまへんでと若返り　カネ
若返りましようとどちらも禿げて居り　城南
若返る秘訣大いに金が要り　没食子
若返り決に帽子を離さない　淡舟
老妻と云われたくない服が出来　圭井堂
若返りしてうちの人どうする気　徳子
若返り人生六十何のその　旭峯
若返り女将の云うた年でよし　辰始
若返る話次から次へと出　久米雄
若返りなさいと家裁で励まされ　承平
若返る今日の肢しい大広間　兼孝
一寸した化粧で妻は若返り　逸人
英会話若い奴等ともろともに　塊人
青葉若葉昔の野心蘇る　某人
若返って見ても戸籍が承知せず　実坊
女子療の笑いの中で若返り　蟻朗

兼題「福」　麻生葭乃選

福耳があって八起きをまだ信じ　胡蝶
流行神福を販売してるなり　塊人
福の神ですと白痴の子をかばい　梨花
裕福に生まれ気ままな娘に育ち　千里
夫唱婦随何は無くとも信じ合い　代仕男
大福帳先々代の筆の跡　紅楓
先代の声が聞える大福帳　芳仙
無駄使いここはいかんと福が逃げ　春吉
福引へ当るもんかとかきまわし　梅里
成上り歌手にだんだん福がつき　失名
福相を褒められながら嫁き遅れ　満秋
残り福まだあるようにいって去り　芙洛
幸福はただ病人のない暮し　悌二
子福者の家族手当をうらやまれ　貴山
お多福も眠むそう凪のぜんざい屋　梅子
福はねて待てと老父もう鼾　東雲楼
福祉施設こども公園出来ただけ　沈魚子
寄附せぬと云う福相がいまいまし　柳叟
お神籤の福を一縷の頼りとし　恒雄
裕福に見えぬみなりの貯金帳　陽子
福引のマッチのような人と添い　一三夫
大吉をビールのつまみから拾い　知恵美
マスコットもすすけて恋に見放され　知恵美
福の神居心地悪いなと思い　恵二朗
残り福どころか定期まで掴られ　日満
整形の医者に取られた福ほくろ　洲枝郎
幸福は母あり赤いカーネーション　摩天郎
結納の簞笥を福茶も待構え　春巣
あざなえる縄といえども福は来ず　好郎
幸福は二人が買うて来たこけし　徳子
福笹のしおれる程の欲を吊る　紫蘭
子福者と云われ手を見るひまもなく　梨花
福は内身勝手なことを口にして　隆史
福笹も燃やしてしまう大掃除　静馬
福運を掴むことにも〆切日　玲人
孫と只遊んで居ればよい暮し　竹荘
幸福を羨まれてる庭いじり　淀月

兼題「旅」　清水白柳子選

御朱印も受けて土産の店に立ち　夢笛
胴巻きも明治生れの腹の旅　清幸
旅先の彼へは思い切って書き　良子
学会へ師は赤ぎっぷ弟子は青　一哲
そこばくの旅情人形の顔を撫る　六龍子
旅に出た女同志がよく笑い　紫香
旅で読む活字が荒いローカル紙　一三夫
旅に出てまでも養子の顔で居り　生々庵

ほどほどにしてやめておく旅の酒　東岸子
旅立ちへ先ず駅前の週刊紙　武助
旅かえりうちの番茶が口に合う　煙司
旅はもうこりこりしたと母帰り　花奈女
ひとり旅死ぬんじゃないかなと思い　恒明
身に合わぬゆかたも旅のおもしろさ　一栄
箪笥に箪あり父の旅つづく　はるを
旅便り名前もよりそう様に書き　柳宏子
出勤をしてから旅の疲れが出　俊見
旅幾日ちがう煙草を買うてみる　某人
旅にあこがれて女房は古くなり　塊人
見送りをまいて一汽車先に発ち　建朗
アルバムにおさめたりない旅のよさ　悦子
百円の手相に旅の気がほぐれ　茶仏
妻と出た旅はあっさり帰って来　静馬
出張予定故郷へ立寄る日が抜けず　好郎
素泊りで寝酒を浮かす旅に馴れ　梅子
ひとり旅煙草の火から運れが出来　昌男
旅の子を話題に夫婦だけの夜　塩飽
体臭がタオルにのこる旅つづく　徳三
方角を決めず旅愁は下駄をはき　久米雄
夕刊を朝読まされる旅の宿　庸佑
旅なれた順に夜汽車は寝つかせる　凡志
乗りかえた支線不安な旅となり　峰子
親切を疑って聞きなれぬ旅　文庫
こんなにも喜ぶ母と旅に居る　以兆
妻はまだ旅を知らない日本地図　城南
旅に出て夫に頼る妻となり　小松園
旅たのしここでも鐘の音を聞き　久米雄

兼題「私」　北川春巣選

前の人が私の意見みんな云い　佳風
私が注がして貰う目出度い日　武助
私も戴きますと目出度がり　水客
も一人の私があって不幸　静観堂
旅の膳妻同権の味にいる　光郎
失恋の旅絶景に来てしまい　葉光
掌で鏡の私ふいてみる　幾子
損を又承知私はお人好し　只世
私から切り出しまっさと床柱　与呂志
自画像がやっぱりピエロになる私　花村
泣寝入ばかり私もしとられず　勝三
私を殺して固い椅子に老け　六龍子
お見合で別な私が舌を出し　七面山
私の名刺拝んでいただかれ　久米雄
私に免じてなどとこうて出る　春日
私の分も頼むとはげまされ　千年
見栄坊の私を私がもてあまし　生々庵
私を主張してから独りぼち　俊江
手も足も伸ばす私の日が欲しい　十悟
掘り下げて見れば私の軽い事　無鬼
蔦が蔓生んで私に似ぬきりよう　井平
ラッシュアワー私のお乳房とこへ行た　阿茶
私からやかましく云うと丸めこき　雄声
私だって私だって気は二十才　若菜
純情な私は過去のものとなり　恒明
同姓同名私と違う門構え　進之助
ようこそ御乗機私はスチュワーデス　可笑
私だけ我慢すればと妻は折れ　庸佑
不肖私不肖私選挙戦　笛生
私の一徹損と知りながら　村雲
私と対決してる日記帳　月都
私のみじめさを知る酒の味　晶晶
一応は私如きと辞退する　水車
私にも夢はあったとアイシャドー　越舟
天皇が私とこそのたまわれ　一ン十
エプロンの白さ私に夢があり　杜的
妻の目と私の鼻の子が欲しい　徳三
正義派の私は馬鹿とまで云われ　言也
私ではあきまへんかと世話焼き来　没食子
私より綺麗でしょうと聞きたがり　遠二
うちとこは私とこはとのろけて居　楽天
デパートをもとの私になって出る　宝山
も一人の私に聞かす録音機　句沙弥
野次馬の一人私も首を入れ　雅巣
私にもしあわせだった前任地　徳子
私私とエゴの面構え　多久志
下積みが性に合うてる私です　清子
私の中で私が不真くされ　雅堂
私みたいなもんと云うている自信　栗
両眼がよしつぶれたりとも私　亜鈍
愚かなるおのれの影も酔っている　某人
貧乏が気強い私そだてあげ　風船堂
私にも出来たクイズがくじで洩れ　むじな
私には遠いデザインから離れ　入仙
鏡台へ私も捨てたものでなし　昌男
電話口私ときいて声変り　峯
私が他人のように肖像画　蟻朗
私なら切手蒐める金で飲む　銀界
私に負け酔うてから妻に負け　雨子仙
私の家内がネーに肩が凝り　豆秋
税務署は私が行くと妻強気　雄々
も一人の私がえやないかえやないか　勢火
もう処女ではない私の影法師　芳仙

兼題「飲み手」　土井文蝶選

招かざる客が飲み手であわてさせ　湖山
左向け左で飲み手馬が合い　十悟
本場所へ飲み手同志が枡をとり　利武
宴会のプラン飲み手に任される　七面山
ブラカード酎の包いも駆けつける　茂雄
駄目でもと猫をかぶって居る飲み手　喜久堂
自他共に許した飲み手酔いつぶれ　生々庵
盃の手真似で飲み手通じてい　阿茶
飲ましたら飲みるがなと呆れさせ　ひか平
お隣りも話し上手と云う飲み手　三司
仲人が一ツ隠していた飲み手　承平
噂さには聞いたが底の無い飲み手　堰子
意気投合飲み手は肩をたたきあい　煙司
一升の酒へ飲み手が揃いすぎ　一藤
まだ呂律廻る飲み手へ注ぎに立ち　代仕男
ただ力むだけで取得のない飲み手　幸路
チビリチビリ唄もおどりもまかしとき　春吉
最初から浴衣をぬいでいる飲み手　いさむ
お流れを頂戴などと来るのみ手　村雲
顔ぶれをみてもう一本買いにやり　小石
献酬がきらい酒仙の飲み振り　半休
つづり方飲み手の父の痛いとこ　省三
炬ざまし飲み手の父に感づかれ　梅子
もみ手する養子の猪口は侮れず　啞酔
奥さんも飲み手と知った炬の出来　幽谷
まだ酒があるぞと飲み手また坐り　文秋
サァー来いと云う身構えの飲み手なり　東岸子
雨の午後飲み手の尻が長くなり　白柳子

色紙短冊
書画用品
大阪枝ばし筋
丹青堂
電話 七二二・七二三

兼題「名人」　須崎豆秋選

先ず酒をのんで名人箸をとり　一角
借金の名人として認められ　東岸子
名人と言われへそ曲りと云われ　千年
名人の剣はなかなか抜きません　あきら
名人の玉子でぬけたとがあり　梅志
嘘つきの名人だんねと妻わらい　圭井堂
名人の暮し湯呑みがかけている　沙智子
アルバムで見ると名人ただの人　清幸
名人の無口が妻を疲れさせ　養流
名人に叱られたのも自慢なり　好郎
名人の肩をたたけばほこりが出　久米雄
名人が風呂屋で着物入れ忘れ　一三夫
ピンボケの様な名人貯めて居る　生々庵
慾の無い名人ちびた下駄を履き　ひか平
名人もある日侘しく飯を焚き　玄武洞
名人の黒子みて来た清水昆　美芳

名人のスリであったとあきらめる　真句朗
名人の一生酒を横におき　茶仏
名人を訪えばふんどし一つなり　水車
名人の和服が似合う白い足袋　薬乙女
芝居気のある名人で親しめず　水客
名人を訪えば囲炉裡で芋を焼き　白柳子
天皇へ大阪弁で文五郎梅子
名人の卵叱られ通しなり　嶺月
名人に鏡を知らぬ妻があり　宝山
名人となって旧作みなおされ　小石
床の間で名人ひざもくずされず　賀峰
不機嫌な日の名人は唖のよう　文庫
名人と並んで釣れぬ糸を垂れ　万楽
名人のふっと考えこむ瞬言也
庭へ出た名人青葉に染まり　某人
名人の負けて静かに首をたれ　山茶花
名人の空見る癖のふところ手　句沙弥
夢の中でも名人駒を持つはるを
名人の裸枯木に似てあわれ　陽子
ふと深夜名人一人何かやり　紫香
名人が子供の様な無理をいい　春秋子
歩を一つ動かし名人汗をふき　雅巣
名人の勘にさわった金のこと　太路
名人にして貰うにも金がいり　阿茶
名人と云う名は死んでから貰い　千永
名人のノミが生きてる午前二時　恵二郎
妻のいう通り名人挨拶し　清生

（YOU清記）

雑川

ハワイ支部句会（ハワイ）

前山北海選

築山快夢起選

死ぬ迄は捨てぬ野心も齢に負け　泉水
野心満々長生がしたくなり　旋風
甲斐性が無いと言われて手を眺め　十吉
野心老ゆむだ花だけの過去を悔い　笑有
八起きまでやる気の野心捨てきれず　草一郎
野心だと云われたくない御膳立　暁舟
真剣な二世の片言日本語　鈴子
親は帰化二世土着の選挙権　周防
二世にも残しておきたい親孝行　風草
世は二世親の捨身が子に光り　拝山
二世もう馬鹿にはされぬ地位となり　芳雨
帰国など忘れてしまえ帰化市民　浪之助
錦衣帰郷お寺の寄附も筆頭　快夢起
散々に遊んで帰国羨まれ　銀水
ホーハナの苦労が今じゃ村大尽　緑風
金持たぬ帰国故郷も四面楚歌　柳葉
帰国して金の亡者に取巻かれ　迷朗
大法螺の帰国に寄附をたかられる　いっ生

雑川

大聖寺支部句会（石川県）

野村味平選

年老いてドライの苦労背負い込み　武富
死ぬ程の苦労を勝抜き遺児守る　とよ
食うための今朝も白髪を分けて出る　幸路楼
お据分け貰ってうれし鮎を焼く　そと枝
料理屋で食えばと鮎を値踏みする　恒雄
鮎不漁カウントの量が危ぶまれ　味平
線ばかり引いて技師長ちと猫背　魯木
貧乏の線を役所はぼかしとき　茶仏
安売りのマイク裏町筋を練り　芳朗
名案もなく安売りを繰返し　千太郎
安売りへ妻気もそぞろ飯が焦げ　久雄
呼様がなくてあのうと新世帯　一路
ご遠慮を叫ぶマイクへまた紫煙　正柳子
終電の一人遠慮のない欠伸　一進
ヒル吸った足を投げ出し野良の風　金仏
素足ふと男の光る眼を感じ　酔羊
無性髭この頃妻も逆らわず　宗太郎
サーカスの様にして撮る写真班　まどか
スピッツの毛並を閑な手が撫でる　たつ路
閑つぶしなどと笑って手内職　光郎
閑な耳又特ダネをはさんで来　城南
末の子の主張に父の苦が笑い　素百々
損と知りつつ主張まげられず　ひろし
青年の主張世間の目をおじず　茶の香

雑川

小松支部句会（小松市）

伊藤茶仏報

あんな良い妻を泣かせる酒があり　城南
済まないと口に出したい時もあり　清子
子にかまけ良妻だんだん恐くなり　千里
良妻と言われ胡瓜の香に染まり　比朗
良妻とおだてて悪友まだ飲む気　清子
まだ運を摑めずジット雲をみる　光郎
雲摑む話相槌だけは打ち　ひ佳留
台風が眼の先雲から教えられ　若浪
効きすぎたチラシ特売だけが込み　一進
何んにでも六神丸が母に効き　やすえ
広島のあれで小型と言う威力　宗太郎
アパートと小型一台だけで越し　芳郎
手内職夢は小型のマネービル　正柳子
割勘にすると小型で物足らず　香径
水びたりさせて小型と言う台風　静古
二次会へ小型ぎっしり詰めて乗り　茶仏

大阪通信病院川柳会

麻生路郎先生選

気短かが順に飛び出す雨宿り　春雄
酔うて来て代理で来たを忘れかけ　没食子
くどくどと理由を述べて代理来る　草右
舞扇ジャズが好きとは見えぬなり　史葉
舞扇持てば五十のしわものび　露児
女湯はさわがし程に混んで居ず　よしを
列席へ音痴でよいと押出され　桃村
サンプルが多すぎ染替迷ってる　竹青
朝寝したといわず交通事故にする　竹荘
女湯はシャボンだけの児が走り　夏生

体温川柳会（貝塚市）

千石荘慰霊灯籠まつり句会

河楊梵鐘報

井戸水へ泳ぎ素麺いい心地　三四郎
素麺を摑む子もあり子沢山　阿季良
一寸待て暇をやるとは云ってない　柳叟
計画を金庫に入れた一寸待て　昌男
湯上りの娼婦西日の中で塗り　甲馬
湯上りきオルバチンコ屋の忘れもの　雅舟
余らせるように取ってる防衛費　富士夫
あり余る才能人をおとしいれ　飄人
いとはんの作る料理は余り過ぎ　武助
不眠症同志寝返り右左　鮎二
蛙ピョンと飛んで夕顔咲きかかり　きさ子
蜜月の宿に河鹿の声も聞き　一雀
蝦蟇トロリ〳〵と客をよび集め　抱亭
なすこともなくて蛙は泳ぎ出し　一蝶
カリプソを歌う気蛙蓮にのる　天平
貸切りのロープウェイが揺れに揺れ　真哉
蒿悠々ロープウェイに背を見せ　準平
キャンプ地はロープウェイの見える丘　若柳
ロープウェイ気持よくホラふいている　梵鐘
ロープウェイいきなり谷の上に浮き

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
大萬
★大万川柳（第七十九回）を募る
兼題「老　後」路郎先生選
締切・九月十五日（句数五句以内）
発表・九月廿一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

編集室からか

—路郎—

★残暑が非常にきびしい。全く夏を持ち越した感じだ。御自愛が願いたい。

★前号は未着がかなり沢山あって愛読者の方々に御迷惑をおかけしたことをお詫び申上げる。こんなことは曾てないことなので原因を調べたら郵便ストだと判った。お気の毒だと思って再送したら、続いて着いたと云って返送して下さった方もあった。係の手数や社が二重発送の犠牲だけではすまない。愛読者に不快な思いをさせたばかりでなく一週間も十日間もの遅着は社の信用を阻害する点が大きい。本誌八月号は七月末に発行されていたのに、一週間も十日間も遅着したところもあった。同じ土地でも、Aに着いてBに着かなかったのもある。本誌は月末には必ず翌月号を出しているのである。ストは長びくだろうと云うようなことを新聞が報じているが、当事者は考えて欲しい。その点、九月も多少遅着するのではないかと不安を感じている。

★お盆の八月十六日夜、東京（雀郎、三太郎）大阪（水府、路郎）の四人でNHKから約一時間にわたって二元放送をした。テーマなどの打合せが前もって行われていない放送だったので、別に素晴らしい話も出なかったが、NHKが斯うした機会をつくってくれたことと、多くの川柳家が好感をもって聴取されたことに対しては感謝している。

★金沢で開く北国川柳大会がいよいよ近づいた。九月七日に本社では川柳忌句会を開くことになっているので、私達は句会の終了後、夜行で発つつもりだ。同行者もかなりあるので賑やかに車中句会などもやれるだろう。せいぜい沢山出かけて欲しい（表紙裏広告参照）

★釧路市の高橋啓三氏が郷土出生の柳人田中吾呂八氏の追想集をまとめるそうである。吾呂八君にはかげながら応援もした仲だし私が小樽へ行った時には歓迎会を開いてくれたこともあるので何か書きたいが、今のところその時間があるか疑問である。

★前号で編集部を強化するために、編集部員の自薦他薦のことを書いたところ、多数の方々がこれに応じて下さった。編集局で協議の結果、「社の黒板」で発表した二氏を部員として迎えることとなった。他の方々は次の機会に譲っていただき応募された好意を感謝する。

社の黒板

▼編集部を強化するため編集陣に左の両氏を加えた。共に不朽洞会員である（八月）

福田妄夢氏
後藤梅志氏

正誤

▼八月号十六頁下段二十行目「灯で拝む」の作者家根抱亭は小田柳叟の誤りにつき訂正する。抱亭、柳叟両氏にお詫びする。

飛燕往来

★前山北海氏（ホノルル市）より
—路郎宛

待望の「古稀特集」昨日届き思わず素晴しいと声を挙げる美事さに心から御喜び申上げます。先生の温容の下の玉句の「古稀によし弟子に孫弟子ひまご弟子」の中の一人である事を心から誇りとします。不朽洞会員、誌友の誰れからも絶賛、タイムスも紹介しました。今夜も並木東田楼氏から素晴らしいと電話して来ました。「川柳五十四年」の玉稿の中に私のことに触れて戴き洵に有難う御座いました。奥さんの「嵐を怖れぬ路郎」には誰も感銘しております。取急ぎ御知らせまで。

古稀若き恩師讃える
我が誇り
五七・七・三一

不朽洞会から

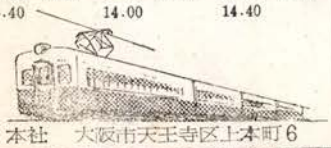
★常任理事会——八月廿四日夜三休橋の生々庵居で開催、出席者は路郎、生々庵、多久志、栞、梅里、潮花、文蝶、恒明の諸氏。

★退会——永田六龍子、小島斗志、谷口四苦峰、吉村凡骨の諸氏は家事の都合で六月限退会された。

★住所を知らされたい——河村良徳、坂永一両氏へ。記念撮影の写真が出来ているので至急住所を知らしていただきたい。

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…
近鉄特急
座席指定・ノンストップ
大阪—名古屋 2時間35分
大阪—宇治山田 1時間54分
名古屋—宇治山田 1時間34分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.40	16.40
8.40	17.40	9.00	18.00	9.40	18.40
11.40	19.40	12.00	20.00	12.40	20.40
13.40		14.00		14.40	



本社 大阪市天王寺区上本町6
近畿日本鉄道

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市津区阿倍野町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

残暑御伺
麻生路郎

川柳不朽洞會（八月現在）

指導
麻生路郎

賛助
長谷川一徹　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　田中辰二　岩崎愛二　中村直勝　洞友　鳥山一歩　亀井花童子　山本雨迷　田村孝之介　山路閑古　柴谷宰二郎　前田伍健　橋本絲雨　高鷲亜鈍　沢田四郎作　東野大八　大谷五花村

不朽洞会員
中島生々庵　奥村丹路　戸倉普天　上田翠光　木村孤浪　戸田古方　西尾栞　市場没食子　土井文蝶　若本多久志　寺井鋭々　古川魔花麗　前山北海　内藤草一郎　三輪晩翠　高沢一浪　田中辰二　井上湧三　宮田不二　川村好郎　西垣錦風　中村直勝　山本雨迷　白砂旋風　三鴨美笑　大鶴喜由　阿形一杉　平尾太希志　笹野旭泉子　戸田喜楽　前川左文字　池上知恵美　岡部三十郎　西尾青一路　石居高志　橋高薫風子　土井雷山　中村九呂平　善木川千鳥　多田はなみ　山田伊三男　岡沢凡志　勝谷山川児　小倉へとち　高崎雄声　高橋操子　伊藤茶仏　武部若葉　樹本露児　宮口笛生　早川清生　小原宇柳　西出一栄　石坂新雪　城内吾柳　井五茶　岡野風の晃　和田登志子　平井井平　酒田清子　西田柳宏子　阿部柳太　梅木宗一　田中蛙眠子　辻圭水　野田一念　松岡委滄浪　山本立児　中松恒雄　林葵丘

―終持会員―

―特別会員―

―正会員―

小川恒明　黄瀬美秋　臼井三林坊　多胡春洋　杉本辰一　木村十悟　安部立美　有友玲羊　建沼康之介　志水礼司　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　島小石　野々口美舟　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋　武部香林　福島鉄児　稲葉鳩花　伊達堰子　坂田東洋男　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　船曳呑張　長尾越鳥　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋　木下幽玉　榎南夏六　新川博也　青木遊星　本田恵二朗　水谷竹荘　尾緑之助　西　いわを　真鍋一飄　松川杜的　馬場夢生　酒井ひか平　弘津柳慶　服部十九平　吉田圭井堂　大森娯句楽　杉谷湖山　長谷川三司　森本法泉子　佐野白水　増田耕民　桑原養痴園　後藤梅志　松下京一楼　津秋六花　菱田満秋　德永雅美　姫田夕鐘　岡村牛耕　伊達堰子　有友玲羊　建沼康之介　志水礼司　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　船曳呑張　長尾越鳥　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋　佐野卜占　足立春雄　小池しげお　竹内圭三　野村初甫　井文秋　小西無鬼　大西迷窓　松村万古　浜畑胡蝶　藤井春日　小沢史葉　有働芳仙　吉田斜水　山口秋花　石川侃流洞　海野比呂史　新岡回天子　池田古心　石居高志　橋高薫風子　土井雷山　中村九呂平　善木川千鳥　多田はなみ　山田伊三男　岡沢凡志　勝谷山川児　小倉へとち　高崎雄声　高橋操子　伊藤茶仏　武部若葉　樹本露児　宮口笛生　早川清生　小原宇柳　西出一栄　石坂新雪　城内吾柳　井五茶　岡野風の晃　和田登志子　平井井平　酒田清子　西田柳宏子　阿部柳太　梅木宗一　田中蛙眠子　辻圭水　野田一念　松岡委滄浪　山本立児　中松恒雄　林葵丘　木村孤浪　桜川不水　岸南柳　直原七面山　水谷谷水　神谷凡九郎　平井井平　西田柳宏子　阿部柳太　梅木宗一　田中蛙眠子　辻圭水　野田一念　松岡委滄浪　山本立児　中松恒雄　林葵丘　戸倉普天　布施筑川　森下愛論　木村水堂　野田素身郎　永松東岸子　酒田清子　藤井五茶　岡野風の晃　上田翠光　尾崎方正　太田良子　八木摩天郎　菊田いさむ　永藤弥平　福田丁路　川阿茶　清水望峰　河村日満田　田村藤波　田代尋四　岡田夜潮　川端鬼酔　西森花村　榻原一善　山川阿茶　清水望峰　松岡委滄浪　山本立児　中松恒雄　林葵丘　菊沢小松園　浜田久米雄　丸尾潮花　黒川紫香　正本水客　石曾根民郎　大西八歩　吉田水車　飯降白香　富岡淡舟　益田永貞女　高崎雄声　勝谷山川児　三村柳風子　伊藤茶仏　池戸桃村　岡沢凡志　宮口笛生　早川清生　小原宇柳　西出一栄　石坂新雪　城内吾柳　井五茶　岡野風の晃　和田登志子　平井井平　酒田清子　西田柳宏子　阿部柳太　梅木宗一　田中蛙眠子　辻圭水　野田一念　松岡委滄浪　山本立児　中松恒雄　林葵丘　清水白柳子　逸見灯竿　北川春巣　林野甦光　木村千容　山本葉光　長野井蛙　西辻竹青　冨岡淡舟　田中鳥耕　本幸男　小池しげお　秋六花　小浜牧人　田満秋　武部香林　福島鉄児　稲葉鳩花　伊達堰子　有友玲羊　建沼康之介　志水礼司　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　船曳呑張　長尾越鳥　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋　武部香林　福島鉄児　稲葉鳩花　伊達堰子　有友玲羊　建沼康之介　志水礼司　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　船曳呑張　長尾越鳥　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋　武部香林　福島鉄児　稲葉鳩花　伊達堰子　有友玲羊　建沼康之介　志水礼司　中島可十　不二田一三夫　野口迷羊　岩崎一伸　黄瀬木人　児島与呂志　船曳呑張　長尾越鳥　佐藤千代春　飯田乃文夫　深見雅堂　加納山茶花　水野水茶　小浜牧人　田満秋

募集

課題吟募集

グループ（廿句以内）中島生々庵選
横丁（廿句以内）須崎豆秋選（九月二十日締切）
末っ子（廿句以内）西尾栞選
サンプル（廿句以内）伊藤茶仏選（十月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選　麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月二十日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第十二卷第九号
定価　五〇円（送料四円）
半カ年　三二四円
一カ年　六〇〇円
昭和三十二年八月廿五日印刷
昭和三十二年九月一日発行
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話　大阪㊥六〇八一
振替口座　大阪七五〇五〇

（禁転載）

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和三十二年九月一日発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人 麻生路郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地 電話大阪(64)六〇八一 振替口座大阪七五〇五〇番
定価五十円（送料四円）

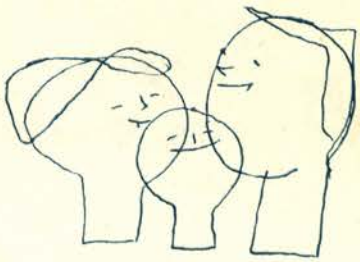
高野山

光明輝く冷房地

避暑列車特発 山上まで1時間50分
特急「こうや号」全座席指定制
なんば発 8時40分 13時20分 13時27分(土)
座席券は7日前からなんば駅で発売します。
展望車席 200円 普通車席 100円
特急 なんば発 8時(毎) 9時20分(日)14時(土・日)
避暑クーポン 1,400円
なんばからの往復運賃と宿坊での1泊2食つき

南海電車

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL (64)551—2

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

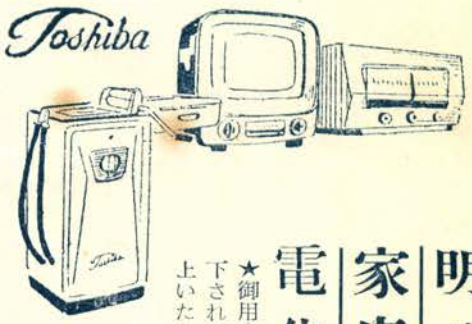
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価 二五〇円
送 三二円

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507



明るい家庭は電化で

★御用命はお電話下されば係員が参上いたします

日本機械株式会社

本社 大阪市南区末吉橋通四丁目十六番地
御堂筋新橋北詰新橋ビル
電話船場(25)1856(代表)～7番